
百年桜町奇譚～番外編～

桜月黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百年桜町奇譚〜番外編〜

【Nコード】

N5727H

【作者名】

桜月黎

【あらすじ】

私、桜月黎は訳あって自分が”都市伝説”というものを引き付けやすい体質になった。これは私が遭遇した面倒ごとの、ほんの一部である。

(1/3) (前書き)

2011/07/28 大幅改稿。

(1 / 3)

*** Sub New (まとめ) ***

人間、本当に欲しい真心こころがあるときに限って、渴いた心をさらに焼く結果になるような建前ことばを求めてしまうような、妙に不器用なところがある。人に好かれなくて、執拗に自分の容姿を化粧や整形で取り繕う行為なんかはその代表例だろう。

そんな矛盾に取り憑かれてしまった人ほど、実は己の行いが不毛であることに正確に気付いていたりする。

知ってはいても認められない、と言う心情もあるだろうし、それ以外に求める方法が判らないというのもあるかもしれない。

ただ、そんなことを続けていれば必ず何処かで、何かが折れてしまう。

金属スプーンの根本に少しずつ負荷を掛け続けた結果、ある瞬間にポロリと首が取れてしまうように。

——私はその日、口裂け女と遭遇した。

*** Sub 1 (口裂け女) ***

六月も半ば、深夜ではないが日が落ちてからしばらく経った頃。

私はジトジトと数日前から降り続いている雨の中を歩いていた。

普段の私なら絶対に部屋から出ない気候と時間である。

私こと桜月黎は、自他共に認める物臭人間なのだ。

それがなぜこうして、スカートの裾を湿らせてまで外を出歩いて

いるのかというと、実に単純でツマラナイことだが、冷蔵庫が空だったのだ。

要するに、夕食に食べるべきものが何もなかったのである。

連日の雨で登下校以外の外出や、行き帰りの寄り道も殆どせずに居たおかげで、食材のストックが切れていたというわけだ。

今日も帰りのホームルームが終了した後は、帰宅部選手権で県大会くらいはいけそうなほど可及的速やかに直帰し、部屋で静かに読書へと洒落込んでいた。

……のだが、いつの間にか居眠りしていたらしく、気付いた時には完全に日が落ちていた。

不思議とこういう時、イオは無理に起こしたりしてこない。朝は休日でもたたき起こすくせにだ。

ちなみにイオと言うのは、今年の春先から、私にくっ憑いている、自称電子を司る妖精である。

エナメルのように輝く若草色の、ウェーブがかった長い髪。

新雪のごとき白く、しかし暖かい生命の温もりを感じさせるきめ細やかな肌。計算し尽されたかのような完璧なプロポーション。何かの回路図を思わせる幾何学模様と、音亡き青の雷光を従えた六枚の羽。身にまとう枯草色の衣は、白磁の肢体の胸と腰を最低限に覆うのみ。ともすれば淫靡にすら見えるその格好も、彼女が持つ荘厳で気高い雰囲気を持つてすれば、健康的かつ艶美なドレスにすら見える。

そして身長約二十センチ弱ほどの小人サイズな姿。

そんな、現実味の無い———というか完全にファンタジーな彼女はしかし、意外なことに、或いは見た目どおりに、実直真面目で几帳面、規則規律の遵守を美德とし、物事の白黒をハッキリさせないと気がすまないという、少々神経質な面がある。

生来怠け者で、衣食住に関してもかなり大雑把な私にとってはある意味最高のパートナーでもあり、同時に一番大きな目の上のたん

こぶでもある。

起き抜けの目ではんやり暗い部屋を眺めていたところに「おそよう」なんて皮肉気に声をかけてきたイオを憮然と睨め付けつつ立ち上がって部屋に灯りを入れ、時計を見たところ既に夕飯としては少し遅い、と言う領域に片足を突っ込む時間だった。

空腹というよりは義務感で、何かあっただろうかとキッチンスペースに向かい小さい冷蔵庫を開けた所、見事に空っぽ。

横目で窓を伝う雨水と遮断しきれずに部屋へ染み込んで来る雨音を確認した私は、早々にこの日の夕食を放棄しようと決めたのだが——その意を聞いたイオに、耳元で十数分ほど、上質な笛をデタラメに吹き鳴らす様な声で喧しい説教を受けることとなる。

ここ数ヶ月付き合ってきて私もいい加減彼女がこういう点で酷く煩いことが判りきっていた。雨が降っているから、なんて言い訳はもちろん聞かない。

美声の聞きすぎでメジャーな音楽が雑音に聞こえるようになっては堪らないので仕方なく、私は下校時に使ってまだ水滴の残っていた傘を再び広げて、近所のスーパーへ出かけることにした。

今はその帰りである。

手に提げたビニール袋に入っているのはキャベツやら人参やらの適当な野菜と、挽肉の小さいパックだ。

こう見えて一応独り暮らしであり、手の込んだところはしないが一応自炊くらいする。

相当裕福な家庭でなければ学生、それも高校一年生程度の身分での独り暮らしというのは往々にして金銭に余裕など無いのである。

部屋を出る前に、翌日の朝食やお弁当のことも考えて、二合ほどお米を砥いで炊飯器のスイッチを入れて来た。

後は買って来た野菜類を適当に切って適当に火を通し、適当に味

付けしつつ混ぜ返してやればそれで夕食は事足りる。

拘りさえしなければ自炊はそれほど難しいものではないのだ。

……などと無精な事を考えつつ、波紋の踊る水溜りを避けながらぼんやり歩いていたときだ。

最初に気づいたのは私ではなかった。

「止まって」

ポリウムを抑えた、しかし鋭い声をすぐ後ろからかけられ、言葉の意味を理解する前に驚きで足を止めた。

俯け気味だった顔を上げると『ソレ』にはすぐに気づいた。

進行方向、二つ先の外灯の下に、人が立っている。

向こうはまだこちらに気づいていないようだ。

離れているのでこっちからも相手の仔細は見えないが、その異様さだけは一目で解る。

今はまだ、夜と言ってもさほど深い時間ではない。だから外に人がいること自体に、不審がる要素はない。

此処は人通りがそれほど多くない道なので、この時間に他人とすれ違うことは珍しいが、それでも皆無ではない。だからここで他人と遭遇するのは珍しいがおかしくはないのだ。

だがソレは圧倒的におかしかった。何が、と言われれば挙げる点はいくつかある。

まず、傘を差していない。

土砂降りとは言わないが、さすがに傘なしで出歩くには少々雨脚が強い。初夏も近いとはいえこの雨でずぶ濡れになるのは身体に良くないだろう。判っててやってるならソレはそれでやっぱりおかし

い。

第二に、その格好。

やたらと暑苦しい、真っ赤なコードを着込んでいる。

色がきついことを除けば、コートそのものは別に変な代物ではないのだが、やはりこの時期に着るものとしては不自然だ。遠目なので絶対とは言い切れないが、どうにもレインコートという感じでもないように見える。

そして第三に、その顔。

鼻から下をすっぱり覆い隠す、不自然に大きなマスクを着けている。

遠目にも判る、市販されているのか甚だ疑わしい、鮮やかな赤色のマスクで顔の下半分を完全に隠しているのである。

そんな姿の、——長い黒髪からして恐らく女性と思しき人間が、外灯に照らされた夜道に、顔を俯け、幽然と立っているのである。雨の中傘もささずに、だ。ハッキリ言って嫌な予感しかない。私は先日ドッペルゲンガー騒ぎでもって、不本意ではあるが身の危険を察知する能力が結構上がっていると自負している。その私がほぼ断言できるといってもいい、アレに関わると絶対に危険だ、命的な意味で。

だってあの格好……どう見ても、

「あら？　もしかしてあれ、口裂け女じゃない？」

右肩やや後方辺りから聞こえるのは暢気なイオの声である。

そんなに悠長に構えられても困る。

今の言葉と私の思い浮かべたイメージが事実であるなら、そんな

ご町内の有名人を見かけた、みたいなノリで居ていい事態ではないはずである。

見間違いか何かであれば良かったのに。ドッペルゲンガーを見た時もそうだったが、人の希望的観測を悉く打ち碎いてくれる自称妖精である。

しかし今はそんなことを攻めている場合ではない。こういうとき、無力な人間がとるべき行動は一つである。

三十六計逃げるに如かずっ！

「ちよっ、待ちなさいよ！ 折角なんだから接近遭遇なさい。向こうはまだ気づいてないみたいだし」

……はあ？ なんて無茶なことを言うんだろっ、この自称電子妖精は。私を殺す気ですか貴女は。

「だって都市伝説よ？ しかも超大物じゃない。さあ、デバッグのお時間よ！」

活き活きとした顔でびしりと前方を指差すイオ。

それが速やかに今此处で実行できるなら協力しなくてもないけど、処理可能なの？

「そんなに射程範囲広がったら、わざわざ貴女にくっ憑いたりしないわよ」

……………。

「うん？」

短い付き合いとはいえ判ることはある。私が何を憂慮しているか判つてて、イオはわざととぼけてる。

「でも遭遇してくれないと、百年桜まで誘き寄せられないじゃない」

……言っていることを無謀さを説明しないといけませんか？

此処から百年桜、およびその威容の鎮座する百年桜公園までは、同じ市内とはいえ徒歩と電車を使って三十分ほどかかる。単に行くだけなら何も難しいことではないが、口裂け女を連れて行くとなると話が違ふ。

そもそも話が通じる存在ではないのだから、声をかけて同道願う

とかできるはずもない。イオが口裂け女すらも友好的に従わせるナンパ術なり口説き文句なりを持ち合わせていると言うのなら、また話は変わってくるけれど。

「まったく、しょうがないわねえ」

わがママを言う子供に妥協する母親みたいな声音で言われた。もしかしてさっきの、冗談じゃなかったの？

どうもこの妖精は人間を少々過大評価している節がある。そりゃ全世界探せば多少の無理難題を華麗にこなせる人も居るだろうが、少なくとも私に出来ることなど殆ど無い。そも、私に何の才能も将来性も無いことを確約してくれたのはイオだったかと記憶しているのです。

「とはいえこのまま放っておくのも危ないしねえ……どうしたもんかしら」

私の抗議やボヤキを無視しつつ、イオはまだぶつぶつと何か言っている。どうしても関わらせるつもりなのか、過去に日本全土で社会現象まで引き起こしたこともある、危険な都市伝説に。

しかし、今は良い。どちらにしても何の用意も知識も無いこの状況では出来ることなど無い。さっさとこの場を離れることにしよう

「……………」。

「……ん、どしたの？」

固まったまま動かない私を訝ってイオが言う。

言われなくても一刻も早く立ち退きたいところなのだが。

行く先へ向けたまま立ち尽くす私の視線を追ったイオはすぐに気づいたようだ。

「あ、あゝ、これはまた」

行く道の途に障害物があれば迂回すればいい。が、どうしても迂回できない、という事態も存在する。例えば――

「レイ、あなた御指名じゃないの？」

……目的地で障害物が待ち構えているとか。

しゃがみ込みたくなった。スカートの裾が濡れるからしないけど。そう、今口裂け女らしきモノが立っている外灯のすぐ横に、私の下宿するアパートの門があるのだ。どうやったって、門の前で出くわす。

「どっかで適当に時間つぶして、誰かが代わりに引つかかってくれるの待つ？」

……え、誰かが引つかからないと消えないの？ あれ。

イオの意見を採用すれば、まあ確かに我が身は無事だが、いかにせんソレはちよつと寝覚めが悪い。

逃げようとしている時点で他人へ押し付けようとしている事と同義だが、万一同じアパートの住人が標的にされたりしたら、思うとさすがにちよつと罪悪感が湧き上がる。

特に親しい交流があるわけでもないが、やはり顔見知りが被害者というのは良い気がしない。

ニユースで遠くの見知らぬ誰かが何人死のうがなんとも思わないのと同じで、単なるエゴでしかないのだけれど。

「裏から忍び込むルート教えよつか？」

——っ！？

唐突に後ろから声がかかって危うく声を出しそうになった。

振り向く。

其処に居たのは一つ年上の先輩、だった人、さかき・しきみ榊識視さんその人だった。

一体いつの間に背後に迫っていたのか、全く気づかなかった——これは仕方ないのだが。急に声かけないでくださいよ、びっくりするでしょ。

「急じゃないよ？ さつきも声かけたでしょ」

苦笑気味に言う識視さんである。

さつき？ 今が本日の初エンカウントじゃあ……あれ？

言われてみれば、私の足を止めた制止の声はイオのものではなかったかもしれない。

息を殺してさえいれば目の前に居ても気づけなくなるという異次元的スキルを持つ識視さんであるからして、こっそり背後に立たれても気づかないのはしょうがない。でも、声をかけてくれたという事は少なくともその時には普通にそばに居てくれていたのだろう。

彼女の声が無ければもっと無防備に『口裂け女』の前へ出てしまったことだろう。そんな恩人の存在自体を気づかなかったというのは、確かにちよつと失礼だったかもしれない。

ただ、一つだけ確認したいことが出てきた。

……一体いつから居たんだろう？

いや、これは単なる確認だ、他意はない。雨の中を散歩中、たまに買い物帰りの私を見かけて声をかけようとしたところ、前方に異変を見つけて制止してくれたといったところだろうか。

「^{みのり}巳^み禱ちゃんに借りた本を、途中で居眠りして取り落とす瞬間はばっちり抑えているわ。動画で」

ウインクと共にぐつと親指を立てて見せる識視さん。それ古いですよりアクションが。御歳17歳の元女子高生を自称したいならもう少し若々しい仕草をですね。

……じゃなくて。え、動画って言った？ なにそれ。

あまりに堂々としたストーリーカー行為の暴露にもはや声もでない。

というかこういう感じのやり取りもここ最近日常化しつつある。反応したほうが負けなのかもしれない。

「……で、裏から忍び込むルートってというのは？」

絶句する私の代わりにイオが訊く。

「文字通りの意味よ」

そりゃ他の意味に取るには表現が直球過ぎるけど。

なんでそんな事を知って……あー、もうコレも考えないでおこう。私の精神衛生面を考慮して。

色んな言いたい事を飲み込み、代わりに出来る限り胡乱な目を向

けてみたが、

「こつちよ」

いっそ見惚れるほどキレイな笑顔でスルーされた。

仕方なく、言われるまま付いて行こうしたところで気付いた。

なぜか私は手に傘を持っていなかった。

そして、つい今さっきまで私が持っていたはずの傘を、何故か識視さんが持っていた。よく見ると識視さんは自分の傘を持っておらず、右肩だけが不自然に濡れている。

まるで無理やり人の傘の中に入って歩いていったような……。

さすがに何か言おうかと思ったのだが。

「……っ」

追って私が振り向いた途端、識視さんが息をつめてすぐ立ち止まったために口を挟むタイミングを逸してしまった。

「あらあ……」

イオもなにやら感慨深げに声を漏らす。

何かと思って二人の視線を追ってみると――

前方、二つ先の外灯の下に人が立っていた。……あれ？

傘をささずに、暑苦しい真っ赤なコートを着込み、長い黒髪を無造作にたらし、赤色のマスクで顔半分を覆った、女性らしき人影である。

試しに振り返って先ほどの外灯へ目を向けると、さっきと変わらぬ姿勢で例の真っ赤な女性は其処に立っていた。

そしてもう一度目を戻す。

やっぱり、どう見ても同一人物としか思えない人影が前方に佇んでいる。

一体どういうことですか、これは。

……口裂け女が二人？

そつえば口裂け女には姉妹がいる、なんて説も聞いたことがあ

るような無いような。

「そうじゃないみたいね」

「ええ、多分この口裂け女は単独犯よ」

私の懸念を否定したのは識視さんで、同意したのはイオだった。

「黎ちゃんかむこう向くと、あっちの口裂け女が消えるのよ」

「やっぱり御指名だったってようね、レイ」

笑えない冗談だった。

私に一体どうしろと。お酌でもすれば帰ってくれんの？

「んなわけないでしょう」

皮肉にマジレスされた。

「まあ、冗談はともかく確かに困った状況よね……」

さして困っていないさそうな表情で、仕草だけ思案している風に言うイオ。とはいえ真面目にやれと文句を言うつもりはない。むしろ彼女が本気で思案顔を始めたほうが状況がヤバイということになるだろうから。

彼女がまだ平常運転なことに少しだけ安心感を得る。

一緒にちらと戻ってきたらしい思考力から、適当にアイディアを拾い上げてみる。

例えば、何か撃退できるような妙案は無いだろうか。こういう致死性の高い都市伝説と言うものは大体後付けで対抗策の噂が色々についてくる。現実的な話ならば、対抗策の『噂』など噂以上の何物でもない、要するに単なるデマだ。

だが相手が『都市伝説』ならばデマだってバカにできない。何せ元がデマや根も葉もない噂の産物なのだから。

「ないわよ？ そんな都合の良い方法」

——え？ なんて？

「だから、撃退方法とか、そーいうすばつと解決できる手段なんて無いんだってば『口裂け女』には」

その瞬間の私は、様になる仕草で肩をすくめて見せるイオを、モニタ越しの凶悪事件でも見るみたいな眼で見ていたことだろう。事

実、現実味が感じられない。

この物語はフィクションです？

「メタなこと言いたいならそれに見合う大物になってからになさい」
いやもう、自分から振っておいて難だがそんなことはどうでもいい。

なんで？ 『口裂け女』ほど有名な都市伝説なら対抗策だっていっぱいあるんじゃないの？

「それが問題なのよ」

口を挟んだのは識視さんだった。

「確かに対抗策といわれる手段は沢山あるわ、全国共通のモノから地方限定のモノまで色々ね。でもちよつと考えてみて？ 『口裂け女』といえば古典的な怖い話でしょ？ 聞いた人が怖がらないと意味が無い都市伝説なの。対抗策が沢山あって、どうとでもなるような相手なんて怖くないでしょう？ つまり……」

言わんとすることに私も気付いた。

対抗策への対抗逸話があるっていうことが。

「コレコレをすれば助かるらしい」という話が生まれても、それが一定以上浸透した段階で「いや実はそれでもダメだった奴が居たらしい」という噂が追従してくるようになるのだ。誰にでも対処可能な脅威は脅威足りえない。怖い話には、それなりの「救いの無さ」が必要なのだ。

「正解」

くるりと宙を旋回してイオが判ずる。なぞなぞを解いた子供に対する母親みたいな暖かく軽いノリだが、聞いた私は背筋が寒く、気が重くなった。

明快な対処法が無いとなると、何のとりえも無い私はもはや出来が良いとはお世辞にも言えない二本の足で遁走する以外の選択肢が無い。それで逃げ切れるというなら、無い体力を振り絞るのだからやぶさかではないのだけれど。

「百メートルを六秒くらいで走れば、もしかしたら逃げ切れるか

もね」

さらりと世界記録更新を進言してくる笑顔が眩しい。

何。もしかして必至じゃないのこれ。

私は大いに動揺する。自分が死ぬかもしれない状況を目の前にして落ち着いていられるほど私は達観していない。

対照的にイオも識視さんも妙に落ち着き払っている。他人事だからなのか、そうだとしたら二人への評価を改めねばなるまい。どちらをもつと超然とした人格の持ち主かと思ってたけど、存外俗物なんですな。

「まあまあ、落ち着いて黎ちゃん。諦めるのはまだ早いよ?」

対抗策なしといわれてしまったのに他に何かあるというのだろうか。識視さんが私をせおって百メートル六秒フラットで疾駆してくれるとか?

やけくそと冗談と皮肉をブレンドして言った私に「それは無理だけど……」と苦笑交じりに識視さんは応えて言を継ぐ。

「対策が無いって言うのは言葉の綾だよ。正確に言うと『決定打』は望めないけど『次善策』ならいくらでもある、て感じかな」

「ですよね?」と識視さんはイオへ目を向け、その視線で説明を求める。

引き継いだイオが言うことを端的にまとめるなら、『口裂け女』ほど古く有名な話は確かに弱点に対応する逸話も多いが、やはりそれと同じかそれ以上に弱点も多いから逃げる時間稼ぎくらいならいくらでも方法があるのだそうだ。

先に言つてよ。うるたえてた私が間抜けじゃないか。

「おろおろする黎ちゃんが可愛くて、つい」

「冗談っぽく舌を出して識視さんはそういつたが、私の眼に狂いが必要れば心の底から来る発言だった。」

ともかく。

とりあえず回避は可能らしいと言うことで、早速方法を相談する。

あまり長い間雨の中突っ立っているのは身体に悪いし、常に視界の端に死を伴った妖怪が見えていると言うのは精神衛生上にも真によろしくない。

「べつ甲飴とかポマードとか、持っていないの？」

と最初に発言したのは識視さん。……だが。

今時分、そんなものを普段から持ち歩いている人のほうが、ある意味妖怪より稀有な人種だと思う。

百歩譲ってべつ甲飴好きで、いつもカバンに忍ばせているような人が居るにしても、ポマードで……まずその名称を知らない人すら居るんじゃないか。正直私だって良く知らない。整髪料かなにかだっけ？

「だめよ、その弱点は後付けだって説もわりと有名よ？ あのと口裂け女に効く可能性が未知数だわ」

「じゃあほら、O型の人は襲われないって言うのは？」

「レイはAB型よ。第一、その説あんまり広くないでしょ」

「百円玉投げたら必死に拾おうとするから、その隙に逃げるって手は？ 百円玉なら黎ちゃんの財布に今、三枚あるはずよ」

なんで知ってんの？

「ソレは福岡限定よ、しかも某レトロゲーム最盛期だからこそその説よ。今効くわけないじゃない」

「なら——」

……………。

いつの間にやら、私を差し置いて空飛ぶ検索エンジンと人類最強の薄影秀才が、口裂け女対策談義を始めていた。

一般人程度の知識しかない私にはとてもついていけないので、対策についてはこの二人に任せよう。

ちらりと様子を伺うと、やはり赤いコートの女は私の向くほうに必ず佇んでいる。

幸か不幸か、向こうから近づいてこようという気は無いようで、
こうして雨の中対策案を議論する余裕はあるらしい。

手持ち無沙汰になり、なんとなく顔を上げる。

青空が広がっていた——傘の裏地にプリントされたハリボテだ。
デフォルメされてた白い雲などが非常に安っぽい、その向こう側
から降ってくるバラバラという音を聞くのは、案外悪くない。こ
んな状況でなければ、だけど。

口裂け女は、大抵の語るところによればこんな風にターゲットを
絞って自ら接触の機会を作るような存在では無く、もっと無差別通
り魔的な妖怪のはずだ。

それがこうして故意に、私をターゲットしているらしいの
は多分、今の私とある体質が原因だ。

端的に言えば、ああいう超常的なモノを引き寄せてしまうとい
うものである。

産まれ付いてのものではない。こんな身体になったのはつい数ヶ
月前である。さらに言うなら自然発生した力ではなく、故意に一方
的に植えつけられたのだ。

誰に？

愚問だ。イオ以外に誰が居るのやら。

現在、彼女は訳あって所謂『都市伝説』を探し集めている。先ほ
ど彼女が言った『デバッグ』というのがそれだ。

簡単に説明すれば文字通りバグ修正のことを指すが、この状況で
使われたことから推して知るべし、日夜サラリーマンがデスクに
噛り付いて行っている作業とは大分趣が異なる。

何せ彼女が修正しようというのは『世界のバグ』なのだから。

世界にはあらゆるバグ——イオが呼称するところの『イクセプシ
ョン』なるものが沢山存在するらしい。そのうちの一種である『ヌ
ル』というモノが、人々の噂や昔話などを元に具現化することがあ

るという。

彼女はそれを探し出し、修正するために現界しているのだそうだ。……不幸なことに、偶然彼女の目に留まる場所に居合わせてしまった私の存在を足掛り（インターフェイス）として。

ところがそんなことを偉そうに言っただけに、今こうして私や識視さんと会話しているイオ自身は、己の本来的な役割であるデバッグ作業が行えないらしい。彼女の弁を借りるならイクセプションの存在を精査するための己の機能を一部分離した、アバターのようなものなのだそうだ。

私が、変なものを誘き寄せやすい体質になったのはつまり、イオのそういう機能に起因する。

しかしそうになると、精査して発見したものをデバッグ可能な本体のところまで誘導し処理する、という異常に非効率的な手順が必要になる。

そして肝心の本体とは、この町の中心にそびえる巨樹『百年桜』である——正しくはその地下に幽閉されているらしいが、処理事態は百年桜公園内に入りさえすれば可能なので区別する意味はあまり無い。

百年桜は、この町百年桜市の文字通り名の由来であり、これ以上無いシンボルである。

市としては単に重要な観光資源であるというだけだが、高さ一〇〇メートルを越すという常識どころか物理法則からも大幅に逸脱している大きさは、あらゆる分野の学者から果てはオカルトマニアまで、多種多様な人々の頭を悩ませ、未だ誰も答えに辿り着けずに居る、巨大なブラックボックスである。

ゆえにこの樹が、本当に常識はずれな事情の上にそびえているということを知っているのは、この町——どころか世界的に見てもごく稀だろう。

ちなみに私は、知りたくも無いのに巻き込まれたクチだ。

結果私は、今年の春からこっち、もうかれこれ二ヶ月以上なかなか

か気が休まらない。

先日も、ずいぶん恐ろしい目に会いつつも何とか生き延びて胸を撫で下ろしたばかりなのだ。

ハッキリ言つてトラウマものだった。おかげでしばらくの間は、鏡やガラス、水面など、自分の姿が映るもの前に立つのが怖くて仕方が無かった。

とはいえこれで終わりだと思えばこそ、徐々に忘れていけるだろうと考えて、できるだけ前向きに明日を迎えようとしていたのだが、事が収束したかに見えた日の翌朝、何事も無かったかのようにイオは私を叩き起こしに来た。

なんで……と、寝起きとは別の要因で呆ける私に彼女は

「これからもよろしくね！」

なんて事も無げに言つたものだ。

真に悔しいことに、その時の笑顔ほど美しいものを見た経験が、私には無かった。おかげで邪険にあしらうことも出来ず、有耶無耶のまま日々を過ごしている。

今思えばソレも一時の迷いであり、ひたすら後悔するばかりだが。例えば、今この状況などがそれである。

六月の雨の夜更けに、道端で、口裂け女対策会議をする。しかもかかっているのはバッチリ自分の命。

オカルトマニアな方々にとっては垂涎モノの状況かもしれないが、命がかかっている身としてはもうそれどころではない。

退屈で平凡、でも平和な日々というものがなんだか酷く懐かしい。

「——じゃそういう感じで」

「了解です」

……どうやら方針が決まったらしい。というか同じ傘の下で聞い

ていたのでもやることはもう判っている。

が、だからこそ言わなければならない。

何せ私の耳がおかしくなったのでなければ決まった作戦の概要はこうだ。」

堂々と横切って追いつかれる前にアパートへ逃げ込もう！

「失礼ね、それじゃあまるで私達が無策みたいな言い草じゃない」
「みたいじゃなくてそう言ったのだ。」

「今色々教えたでしょ、口裂け女が怯むと言われている言葉とか。向こうが動き出したら片っ端から試してみるのよ、一つくらい当たりがあるでしょう」

正直に言います。聞いてませんでした。

「作戦の肝は『口裂け女は建物の二階より上にあがれない』って話だよ。今口裂け女が立っているのは黎ちゃんのアパートのすぐ目の前。この説に賭けてみようと思うの。がんばって逃げ込めば何とかなるわ、もちろん私が全面的にフォローするし」

私の態度に慚然とする電子妖精と、寡聞などと謙遜しているわりに妙に自信満々の万能秀才。

よく知らないけど、その逃げ場候補もさっきのべつ甲斐とかと同じで対策案の一説なんじゃないの？　ずいぶんと、リスキーじゃないませんか？

自分は何も考えてないくせに文句を言うのも筋違いかもしれないが、こっちは命がかかっている、できればもっとリスクの低い策が欲しいのだが。

「大丈夫、私が必ず黎ちゃんを守るわ。一度死んだ命、あなたに捧げましょう！」

「……………」

この人の言葉は驚くことに本気であるから、恐ろしくもあり頼もしくもある。……私なんかのために命掛けられるのは、正直なところ

る居心地が悪いんだけど。

しかし、このまま此処に突っ立っているわけにも行かないし、もうこの策とも呼べない策に乗るしかない。

幸か不幸か、ここにいる二人は頭脳プレイをさせたら人類で右に出るものはそうそう居ない、とんでもない存在なのだ。

頭が世の電子ネットワークに直結しているイオは知識量に関してはず人類で勝てるものはいないだろうし、識視さんもその頭脳は並じゃない。普通に考えれば彼らの結論よりもベターな意見などありえないのである。

「それじゃ、作戦開始ってことで」

「ふふふ、いいわね。先が読み切れない、ワクワクするわ……まとも生きていたらこんな状況、きつと出会えなかった。うふふふ」
不気味に満足そうに笑う識視さん。

この人はもしかすると、単に自分の娯楽でやっている可能性がある。何せ（表向き）生前、彼女は天才過ぎて何でも出来てしまったがために、いつも何処か退屈そうにしていた節が在る。

……だからといって、あまり遊ばれるのも困るんだけど、大丈夫だろうか。

多少不安が募るが、モタモタしていても仕様がないので、意を決して私は歩を進めることにした。

やはり、近くまで行かない限り向こうから接触しようという気は無いらしい。恐る恐る近づいていても口裂け女は今のところピクリとも動かない。

もしかすると、自分から近づける距離というものが暗黙的にあるのかもしれないが、そんなこと私が知る由も無い。不意に動かれないうなら願ったりである。

近づくにつれて、その様相がよりハッキリ見えてくる。

大体は遠めで見たときとなんら変わらないが、一点、近づいてみて初めてわかったことがある。

やたらでかい、背が。

長い髪や全体的な身体バランスを見ても、やはりそれは女性なのだが、身長がかなりある。私とて背は割合低くない方の人間なのだが、それでも口裂け女の頭は見上げる位置にある。目測できるほど器用ではないが、多分180cm以上はあるんじゃないだろうか。

真っ赤なコートのポケットに両手をつっこみ、鮮やかな血色のマスクで顔を隠し、長い髪を無造作にたらし、外灯の下で、雨の中傘も差さずに、物憂げに佇む長身の女性。

『口裂け女』という要素を無理やり思考から追いやって好意的に見てみれば、待てども来ない、恋人を待つ哀れな女性、と見えなくも無い……かもしれない。

もつとも、今回に限っていえば、亡き恋人でなく私を待っていたわけだが。

ついに目の前まで来る。

口裂け女は変わらず微動だにせず佇んだままだ。

「……？」

目の前といっても二メートル程度離れてはいるが、声をかけるにはもう十分な距離である。にも関わらず、未だに向こうからのアプローチは無い。てつきり声が届くくらいの距離まで来たら有名な定型句「わたし、きれい？」が飛んでくると踏んでいたので、なんとも拍子抜けだ。

歩をそのまま進めれば、何事も無く通り過ぎる事すらできそうだった。

そして結局、そのまま通り過ぎてしまった。

あとはすぐ其処にあるアパートの門扉をくぐり、階段を上ってしまえばめでたくゴールである。

「何にもアクション起こさないわね……ツマンナイ」
すぐ後ろに居る識視さんがそつと耳打ちする。

最後の一言が余計だが、実際言葉通りだった。

さすがに完全に背を向けるほどの度胸は無いので、横目で見える程度に視野を調整しながらじりじりと、佇む赫い女性を迂回するよう移動する。

迂回といってもせいぜい数メートルだが、緊張感も相まってかなり時間がかかったように思えた。

ようやく、門扉に手が届くところにたどり着く。

多分、私はそこで安心してしまったのだろう。

此処まできて何もしてこないなら、きつとさっきまでの不安は杞憂だった、と。そう思って気を抜いた。

私は、昔から知人によく言われた言葉を、後になって思い出すことになる。

「大抵の事はそつなく手堅いの、いざというときに、キミは詰めが甘いよね」

道路とアパートの敷地を跨ぐその瞬間、ずっと目の端に捉えていた紅いコートが一瞬だけ視界から外れた。

——ドンッ

と、背中に衝撃を受けて思い切りつんのめる。

辛うじて泥の上にダイブすることはなかったが、さっきまで張っていた緊張の糸を思い切り弾かれたせいで、思わず買い物袋を水溜りへ取り落としてしまった。

何事かと、無理やり姿勢を正して振り返った刹那。

——シュカッ！

眼前を左から右へ、何か光るものが通り過ぎ、遅れて来た鋭い風が、降りしきる雨粒を水平方向に吹き散らした。

反射的に、通り過ぎた何かの行く先を目で追う。

アパートのコンクリート塀に、鋭利な金属が根元まで深く突き刺さっていた。

パツと見て判る、オーソドックスな折りたたみ式のナイフだ。

次いでそれが飛んできた先に目を向けようとしたところで、

「走ってっ！」

鋭く放たれた識視さんの声で、私は唐突に状況を理解した。

普段使わない身体のパネを強く効かせるようにして、飛ぶように踵を返し、そのまま駆け出す。

水溜りに足を取られそうになって身体と地面が作る角度が狭まる。どうにか転ぶ寸でのところでこらえたが、肝が冷えた。背筋を虫が這い上がるような悪寒に撫でられる。

そのときまた、さっきまで私がいた空間を外灯の光を反射し、雨粒を散らして尾を描く鈍色の物体が通り過ぎていくのが見えた。

あまり考えたくは無かったが、その軌道からもう明らかだった。なぜだかあの口裂け女は、あるうことかお決まりのセオリー文句すらすっ飛ばして、いきなり得物を投擲してきたのだ。

一投目は、おそらく識視さんがとっさに逃がしてくれて難を逃れた。

二投目は、私が転びそうになったおかげで偶然外れただけだ。

三投目は、もう避けられる要因が思いつかない。

とにかく、私はもう全力で走る以外できる事がなかった。

これほど必死になった事が未だかつてあっただろうか。

先日の『ドッペルゲンガー』のときも、ずいぶん走らされたが、こんなに逼迫してはいなかった。

とにかく出来うる限り大きく、早く、足を動かす事に集中する。

この時ばかりは、好んで普段着にロングスカートをチョイスする自分を心底恨めしく思った。

今まで傘をさしていたとはいえ、長時間外にいたために湿って布も随分重たくなっており、ただでさえアクションに適さないだけに、走りにくいつたらありやしない。

恥を承知で言うが、このとき私は純粹に我が身可愛さで走っていた。

さっきまで持っていた買い物袋も、わりと気に入っていた雨傘も無造作に放り捨てていた。

だからそこで、アパートの上階に向かう階段へ走りながら横目で後ろを伺ったのは、単なる怖いもの見たさと、押さえ切れない恐怖から来る反射行動だった。

それは自分の正気を疑う光景だった。

口裂け女は、さっきまで持っていなかったはずの――恐らくあの赤いコートの中に隠していたらしい、農作業などで使う草刈用の鎌を節くれ立った右手に握って振り上げ、いつの間にか取り払ったらしい血色のマスクの下に隠されていた、耳元まで開いた大きな口を広げ、ものすごい鬼気迫る形相でこちらに向かって猛然と追いつがろうとしていた。

その眼前へ、そよ風のように柔らかく、しかし疾く、私を庇う位置に滑り込んできたのが識視さんだった。

それを、あたかも邪魔な草を刈り取るように、無造作に、手にした鎌を振り下ろして斬り除けようとする口裂け女。

何が起ったのか、一瞬わからなかった。

口裂け女が、手の鎌を振り下ろそうとする初動モーションとして、小さく振りかぶったのを見た次の瞬間には、その手は女の左太腿辺

りの位置にあった。鎌の刃が外灯の光を反射して作っただけの軌跡が、後から目に飛び込んできたようにすら見えた。

振りが速いとかいうレベルではない。物理法則に則っているのかすら怪しい異常な動きだった。

そんな、私の目から見ればどう考えても必殺の一閃を真正面から受けたはずの識視さんは、しかるに無傷だった。

半身を引いただけの最低限の動きで綺麗にかわしたのだ。

それどころか、かわす動きの流れを殺さぬままくりと回りつつ深く身を落し、得物を振りぬいた余韻で姿勢が崩れている口裂け女の懷にもぐりこみ、体をバネのように強く弾いて背中から体当たりするという反撃までやってのけた。

鉄山てつさん靠かう、或いは貼山てんさん靠かうと呼ばれる、中国拳法、八極拳の技である――とは後で聞いた事である。

有名な技だそうで、ゲームをはじめ、色んな創作作品でも多用されるものなのだそう。生憎そういうモノには縁が浅いので私は知らなかった。

驚くべきはその威力だ。

ゲームや漫画なんかでは、表現が誇張されるのが当たり前なので何の違和感も無いが、打ち込まれた口裂け女が二、三メートルほど吹っ飛ばされて雨粒と共に地面に叩きつけられるのを見せられてはもう絶句するしかない。

相手が普通の人間なら、百歩譲ってまだ受け入れても良い。識視さんは頭だけでなく身体能力も半端無いのだ。

だが今回の相手は人間では無い。人の形をしてはいるが、あれは紛う事無く化物である。

世界と言う名のシステムに巢食バグう構造欠陥、概念の空隙たる『ヌル』。

そこに、人々の活きた妄想や空想、その他の混沌とした思惑や感情の入り混じった都市伝説という実体の無い不定形概念が、真空を

埋める空気の如く流れ込んで擬似的に世界での存在意味を獲得した、実態のある現代妖怪。

それは人の意識の産物であるがゆえに、世界の物理法則には反しない。

しかし、それは極端な不可能現象を起こさない、というだけの意味しかない。例を挙げるなら、光速は超えないが音速は超えられるとか。

つまり、都市伝説の内容如何では、物理的に再現可能な限り、いくらでもとんでもない力を発揮する可能性があるということ。

そして今回は『口裂け女』だ。

人を殺す、という逸話を持つだけに、その力は人の形としてありえる、最も凶悪な能力を有していてもなんら不思議は無いのである。事実さつき、彼女が振るった鎌は、たとえ並以上の動体視力を持っていたとしても追うことも出来ないだろうモノだった。

あの節くれ立ったか細い手に、通常では到底出しえないような腕力が秘められていることは、恐らく間違いない。

識視さんはそんなモンスターの真正面に立ちふさがり、あろうことか反撃して数メートルも弾き返したのだ。

規格外スペックにもほどがある。

あまりのことに、私はいつの間にか足を止めていた。

——それが、いけなかった。

「何してるのっ!？」

そう怒鳴ったのは、イオだった。

その声に気付いた識視さんがハッとしてこちらに顔を向けて叫ぶ。

「っ!?! 走ってっ! 早く!」

そのやり取りは時間にして三秒にも満たず、その動作で生まれる隙は一秒にも満たないが、肝心の私は咄嗟に反応できなかった。

それで充分だった。

弾き飛ばされた口裂け女は、跳ね上がるように即座に身を起こし、ロケットスタートなんて目じゃない尋常を打ち破る初速度でもって既に走り出していた。

真っ直ぐ、私に向かつて。

口裂け女の走力には諸説あるがその中に一つ『日本中に噂の広まった速度』を根拠にしたものがある。それによると、口裂け女は

——百メートルを、3秒で走り抜ける。

識視さんの当身で稼いだ距離が約三メートル、私が先行して走った距離が——驚くべきことにたったの十メートル弱。

合わせてやっと十メートルいっぱい程度だった。

その距離をこの口裂け女は——コンマ以下五秒でゼロにした。私には、十メートル先で起き上がっていた緋色の女が、瞬間移動して目の前に現れたようにしか見えなかった。

視界の左上の方に草刈用の鎌が、既に高く掲げられているのが見える。

そこで唐突に、世界が飴に飲まれたような感覚に陥った。

視界から色が消えうせ、音が遠のき、自分の身体も含めて、全てがスローモーション映像のように緩慢になる。正常なスピードを維持しているのは意識だけだった。

焦燥に追い立てられ、まともな思考も出来ないような状態だったはずなのに、奇妙なまでの冷静さが戻ってきている。今なら、あの鎌が振り下ろされる前に、眼前に開かれた耳元まで裂けた大きな口に並ぶ、やたらギザギザした歯の本数まで数えられそうだ。

ゆっくりと、本当にゆっくりと鎌が後方へ少しだけ引かれる。振り下ろす前動作だ。

「ワタシ、キレイ？」

そう、口が動くのを見た。

答えさせる気が無いくせに、未練がましくまだその質問をするのか。と、状況のわりに理性的な苛立ちを覚える。口と手が動くなら、襲う前に言えとツツコミを入れたいところだ。

振りかぶる動作が止まる。かと思うと、急に再生速度が戻ったかのように、見慣れた常識的スピードで鎌が振るわれる初動を感じた。いや、感覚が戻ったのではない。

この緩慢な世界で、通常通りのスピードに見えるくらい、その振りが速いのだ。

思わず私は目を瞑ろうとしたが、そんな所作さえ思うようにいかない。

ああ、これは死んだかな、なんて妙に冷静に考える自分がいた。死ぬ自分を冷静に俯瞰できることが、果たして冷静な精神状態と言えるのかは、判断に困るところだが。

——ブワッ

「……………」

世界の時間が元に戻る。

眼前を何かが通り過ぎ、少し遅れてやってきた鋭い風が私の前髪を吹き散らした。——それだけだった。

あれ？

痛みなどは全く何処にも感じない。あの距離で口裂け女が攻撃を外すようにはどうしても思えず、私は戸惑った。

——カキンッ

という音はすぐ足元だ。それとほぼ同時に、

「走ってっ！」

今度は反応できた。

とりあえず色んな疑問はその辺に置き去りにして、踵を返す。

幸い階段まではもう、一、二メートル程度の距離だったので、一歩踏み込んでから、飛び付くようにして足を掛け、一気に駆け上がった。

どうやら助かったようだ。

『建物の二階には上がれない』という説がそもそも通用するかどうかも不明だったわけだが、どうやら当たりだったらしい。或いは別の要因で助かったのかもしれないがこの際結果が全てだと考えるのを放棄した。

何故かいきなり襲われてしまったので、折角事前に教えてもらった時間稼ぎの対抗策の数々は全くの無駄に終わった。……元々ちゃんと暗記出来ていなかった上に、結局のところ私自身は逃げることにすらままならず足手まとい状態だったのはもはや弁明の余地がない。イオ達には感謝せねばならない。恩着せがましいことを言う性質ではないけれど。

「それにしても、全くヒヤッとしたわよ。レイってば、折角シキミが時間稼いでくれたのにボケッと立ち止まるんだもの」

今居るのは私の部屋だ。

あの後、アパート二階まで退避した私は、生きた心地がしないまま、ふらふらと身体を引きずって自室の二。三号室まで辿り着き、靴を脱ぎ捨ててそのままバスルームへ直行。すっかりずぶ濡れになった衣類を洗濯籠へ放り込み（ここまで来てようやく、自分の服がずぶ濡れの泥だらけになっていることを思い出した）、シャワーを浴び、部屋着に着替えて、お湯を沸かして紅茶を入れ、一口啜ったあたりでようやく落ち着いてきたところである。

いや、だって、識視さんがあんまりにも常人離れた体術を披露するもんだから……

「あの子は最初から常識はずれだったでしょう？ 何を今更」

聞き方によつては酷い言い草である。否定はしないが。

「でも、今回ばかりは、シキミが全面的に命の恩人ね。彼女が居なかったらあなた、今頃胴体袈裟斬りにされた拳句、口を耳の所まで引き裂かれた猟奇死体になってアパートの玄関口に転がってたわよ」

.....

そうハッキリと遺体状況を明言しないで欲しい。

「ま、次に逢うときにでも、何かお礼の一つもするのね」

そこは渋る理由も無いし、言われなくてもそのつもりだった。本当に、今回は彼女が居なければ今こうしてお茶を啜っていられなかったのは間違いない。

..... あれ？

そういえば傘や買い物袋と一緒に、識視さんを完全にあの場へ置き去りにしたまま私だけ逃げてきてしまつてないか？

存在の稀薄さゆえに、すっかり忘れていたがその後彼女はどうかのだろうか。

私自身もかなり逼迫していた所為もあつて、一番の恩人の安否について事ここに来て今更思い至るとは、我ながら薄情者である。

もし万が一のことになつていたらどうし――

「じゃあ、とりあえず私にもお茶を入れてくれるかな？」

っ！？ ――と、熱っ！？

突如、声と共に背後から何者かがしなだれかかつて来て、危うくカップを取り落としそうになる。

「おっ、とっ」

慌てて左手を使おうとして、うつかりモロに側面を抑えてしまい、熱さで反射的に手を引っ込めたせいで、今度こそ本当に落しそうになったが、後ろから伸びてきた手が器用に支えてくれて何とか事なきを得た。

「ふふつ、気をつけないと。服の上から熱湯かぶったら大変」

何食わぬ声で言うのは誰あろう識視さんである。いつから居たん
ですか、と言うのはもはや野暮というものだろう。

左肩にかかる重みに顔を向けると、そりゃあもう間近というか頬
が触れる識視さんの顔があった。

近い近い近い。

声を聞き顔を見た途端、現在の状態も正しく認識される。

彼女は二人羽織的要領で私の背中に引付き、伸ばした手を傾き
かけていたカップに添えていた。

さらによく見ると、裸だった。

……って、何ですかその格好は。

正確には、身体にバスタオルを一枚巻いている状態なので半裸と
言うべきだが、あんまり大差ない。

頬に当たる髪がしっとりしており、シャンプーの香りがかすかに
感じられる。

うちにあるシャンプーと同じ香りだ。もしかしてこの人、勝手に
人んちでお風呂入ってたのか。

別にダメとは言わないから、せめて一言かけてくれればいいのに。
とかなんとか色々文句は浮かんだが今回は全部飲み込む。

無事でよかった。

……けど、そういう格好のまま引付かれていると同姓とはいえ
対処に困るのですが。

身動きできずにドギマギしていると、風呂上り特有の赤らんだ顔
を、艶然とした微笑に歪めて面白そうに問うてきた。

「さて問題です。この部屋に帰ってきたとき、玄関のロックを解除
したのは誰だったでしょう？」

……。

そういえば、自分で開けた記憶が無い。

慣れた動作だし、無意識にやったとしてもおかしくはないのだけ
れど、そう聞かれると自信が無い。

よくよく思い出してみれば、自分の服がびしょ濡れで即洗濯決定状態だったのに気付いたのはバスルームに入ってからなのに、どうして私は帰りついてそちらへ直行したんだっけ？

言われてみると、その辺の行動は自発的にやったというより、何か促されるままに身体を動かしていたような気がする。されるままに服を脱ぎ払い、頭からシャワーを浴びせられて……ん？　ちよつと待て。

私が風呂場から出て電気ポットの電源を入れ、お茶で一息つくまでの間にそんな何分も経っていない。

なのに彼女はシャワーを存分に堪能した直後のような状態で私の背に張り付いている、特別な異性や家族以外にはあまり見せないほうが良さそうな、あられもない格好で。

もしかしてこの人――

「髪、ちゃんと乾かした方がいいよ？　黎ちゃん、髪長いし多いんだから、放っておいたら風邪引くわ。あ、それとも自然乾燥主義？　それなら悪いことしちゃったかな」

何のことかと思つて目を泳がせると、普段洗面台横で埃を被っているドライヤーが、識視さんの傍らに転がっていること気が付いた。

――っ！？

自らの髪に手を触れると、さっき出たばかりだというのにすっかり乾いている。

別に自然乾燥主義者で、ドライヤーを当てられたことにショックを受けたわけじゃない。

今の今まで、私は誰かにドライヤーで髪を乾かされていたのに、全く気付かなかったことにショックを受けているのだ。

彼女の気配の無さは良く知っているつもりだったが、まさかこれほどとは。

身の回りのことすら、気付かない内になすがままされるがままになつていたのかと思うとゾツとしない。

悪用したら大概の事は明るみにさせず完遂できそうである。そう

いうことに自身の力を振るうような人間ではないのだけれど……。

「そうそう、それからアレ、一応拾って来ておいたから。傘も玄関に置いてあるよ」

指されたほうを見ると、さっき捨て置いてきたはずの買い物袋が机の上においてあった。

水溜りに落したのでかなり汚れているが、野菜は洗えば何とかなるだろう。肉もパック入りなので容器が破れたりしていなければ問題ないはずだ。傘も回収しておいてくれたらしい。

重ね重ね、今日は頭も上がらない……と、素直に感謝したいのに、釈然としないのは何でだろう？

「ああ、でもにじんだけはダメにしちゃった。ごめんね？」

人参？

確かに買ってきたけど、何故人参だけダメになったんだろう。こ
とさら衝撃に弱い品でも無いのに。

「あなたの命の恩人その二よ」

と言ったのはイオだ。

人参が命の恩人というのは一体どういうことだろう。半端に韻を
踏んでいて語感が寒い駄洒落みたいだ。

「最後の一撃のとき、あなたどうして自分が助かったと思ってるの
？」

そついわれてみれば気になる点だ。実際あの時は助かったことに
驚いたくらいだった。

問う目を向けると、心得ていたというように、イオはつらつらと
説明しだした。

最後の一撃。

目の前で鎌を振り下ろされる瞬間。

あのとき、口裂け女が攻撃を空振りしたのは、その直前で得物を
取り落としていたおかげだったらしい。

さすがに自分が駆けつけるのでは間に合わないと悟った識視さん

は、丁度手のすぐ届く範囲に転がっていた物を鋭く投擲したのだという。それがたまたま袋から転げ出ていた一本の人参であり、うまい具合に命中したのが、口裂け女の手元だった。

それは人参が砕けてしまうほどの衝撃だったらしく、おかげで効果はしっかりあった。

振りぬぎざまに衝撃を与えられ、鎌は手からすっぽ抜けたのだ。振り下ろす動作を既に始めていた口裂け女は、そのまま空手でもって空を薙いだのだ。

元々鎌のリーチで振るった手は私に届かず、そのまま空振りに終わった。

そういえばあの時、目を開けた直後、硬い衝突音を聞いた気がする。あれは鎌の刃が、地面にぶつかった音だったというわけだ。

なるほど、それなら確かに砕けた人参は、私の命の恩人と呼べる人じゃないけど。

語感が微妙に滑稽だが、助かったのに変わりはない。しばらくは人参様を大事に扱うことにしよう。

「それにしても……ふふふっ」

あらましを聞き終えたところで、思い出したように識視さんが笑い出した。

「人参のおかげで、口裂け女から逃れたっていうのも、随分皮肉な話ね……ふふっ」

「ああ、なるほど、確かにそうね」とイオも同意する。

解っていないのはどうやら私だけらしい。

「口裂け女のルーツの一つに、こういうのがあるのよ。」

明治時代に、恋人に会うために山越えをしようと思った女性が、山賊がいるかもしれない山を、女の独り身で歩くのは危険だと想い、丑の刻参りの格好をして手に鎌をもち、口到人参をくわえて山を越

えた。

ってね」

.....

そりゃ、確かに山賊も裸足で逃げ出すだろうね。

(3 / 3)

*** Sub 2 (後日談) ***

いきなりだが後日談である。

対策、探索など色々と難儀することが予想された『口裂け女』だったが、事はあまりにもあっさり収束してしまった。というより、私たちはその後全く関わらなかった。

私が臆病風に吹かれて確保作戦を渋った、というわけではない。あの口裂け女は、なんと勝手に消滅してしまったのだという。そのことを、私は隣のクラスにいる噂好きの同級生、はなし・みより 噺心縁さんから聞くこととなった。

彼女はもちろん、イオが世界のデバッグ作業——『都市伝説』集めをしていることなんて知らないし、そもそも見えもしない。私が口裂け女に遭遇した、なんてことも当然知らなかった。……はずだ。

*** Function 1 (わたし、きれい？) as

噺心縁***

自分が誰なのか、彼女は思い出せなかった。

自分が何をしようとしていたのか、彼女にはわからなかった。

此処が何処なのか、彼女は知らなかった。

在るのは、何か言い知れぬ哀哭の情と、強いコンプレックス、

そして、ナニかを探していた、という漠然とした目的意識のみである。

「わたし、きれい？」

気付くといつも、何処とも知れない街の、外灯の下に立っていた。あるときは真っ白なコートを着ていた。あるときは真っ赤なコートを着ていた。顔には大きなマスクをつけていた。何をすればいいか、わからない。でも探し物がある。

「わたし、きれい？」

探しているナニ力を持った人が来てくれるのを、ただ待つ。でも、誰がそのナニ力を持っているのか、彼女にはわからなかった。

だから、聞く。近くを通る人に、聞くのだ。

でも、何を、どう聞けば、望む答えがもらえるのか、彼女にはわからなかった。

だから、口をついて出る問いかけはいつも同じ、望む答えが得られない、不毛な質問、或いは、確認。

「わたし、きれい？」

自分には、他の人と違う部分がある。そのことが、彼女は酷く悲しかった。明らかに、自分は他人と違う。

それが酷くコンプレックスだった。

だから、聞く事が、望む答えを得られる質問が思いつかないと、自然と口から、その言葉は漏れて出た。

「わたし、きれい？」

いつものように、彼女は質問する。
答えは、知っている、聞かなくても。
その日も、やっぱり答えは同じだった。
怯えた声で、見知らぬ誰かが、答える。
——わかりません

「わたし、きれい？」

いつも、答えは、聞かなくても判る。見れば判る。

『キレイ』という人も。

『ブス』という人も。

『まあまあ』という人も。

皆、怯えた顔で、答える。見れば判る。

「わたし、きれい？」

そのうち皆、色んな事を言うようになった。

——ポマード！ポマード！ポマード！

——犬が来た、犬が来た

——カシマ様114号線にさようなら

意味は判らないが、やっぱり同じ答えだった。見れば判る。

「わたし、きれい？」

質問したあとのことは、よく判らない。

いつも通りの答えを聞くたびに、彼女は酷く悲しいと感じていた。
悲しくて、悔しくて、泣きたい気持ちになった。

そこまでしか判らない。覚えてない。

だから、悲しみが去ったあと、気付くと彼女は、また何処かに立っていた。

「わたし、きれい？」

その日は、いつもと違っていた。

いつものように、外灯の下に立っている。

雨が降っていた。

遠くから、傘をさした少女が歩いてくるのに、彼女は気付いた。

あの少女は、望む答えをくれるんじゃないか、そういう希望的な気持ちで、なぜか抱いた。

だから、いつもは近くに來た人に質問していたけど、今日はあの子に聞いてみようと思った。

ところが、その少女は、此方に気付くと立ち止まってしまった。

なんで来てくれないんだろう？　彼女はそれでも、その子が来るのを待ち続けた。

しばらくしてようやく、少女が近づいてきた。

彼女は、もう随分と久しぶりの気持ちで、自分の中に沸くのを感じた。

やっと、望むものが手に入るかもしれない、あの子がナニカをくれるかもしれない。

そんな明るい気持ちだった。

そうしてやっと、声がかけられるところまで、その少女は來てくれた。

さあ、聞いてみよう。

私にナニカをくれるかもしれない。

その少女の顔を見る。

それだけで、判った。見れば判る。

それは見慣れた答えだった。

まだ問いかけてないのに、その少女は既に、よく知った答えを提

示してきた。

なんでだろう？ 彼女は思った。

アナタはナニ力をくれる人ではなかったのか。

どうしてそんな顔をするのか。そんな目で、わたしをみるな。

彼女の希望は、裏返って、絶望になった。

酷く悲しい。酷く悔しい。

また、ソレか。また、その答えか。

彼女の悲しみは、あつという間に、怒りへ変わった。

許さない。

許さない。

許さない。

■ ■ シテヤル。

× × シテヤル。

オマエモ、ワタシノ、カナシミヲ、シレ！

「わたし、きれい？」

気付くと彼女は、また外灯の下に立っていた。

いつもどおりだけど、いつもと違つと、彼女は思った。

酷く悲しい。酷く悔しい。

いつも感じる気持ちをも、いつもどおりの答えを聞く前から持っていた。

でも、それだけだった。

いつもどおり、何をしたらいいか、わからない。

なら、やっぱり聞くしかない。

だから、ただ、待つ。

彼女は、それ以外の方法を知らないから。

遠くから、足音が聴こえる。

規則正しい靴の音と、奇妙な硬い、軽い音。

靴音にあわせて、音楽を奏でるような、コツコツという、軽い音。

外灯と外灯の間に降りる、夜の闇。

ちよつとだけ光の届かない、影のカーテン。

そこから、白い杖で地面と音楽を奏でながら歩く、少年が現れた。今日は、この人に聞こう。と彼女は思った。

少年は、彼女のことを、まるで気付いていないかのように、すみ顔で歩いてくる。

このままでは、通りすぎてしまいかもしれない。と彼女は思った。だから、呼び止めた。

そうしないと、聞けないから。

「ねえ」

「……はい？」

少年は、白い杖の音楽を止め、足を止めて、彼女の方を向いた。

「何か、御用ですか？」

丁寧に、少年は言った。

濃いサングラスをかけた少年は、彼女の質問を待つ。

彼女は、やはりいつもどおりの質問をする。

最初から答えがわかっている、質問をする。

いつも同じ、望む答えが得られない、不毛な質問、或いは、確認。

「わたし、きれい？」

「えっ？」

驚いたような顔をする少年。

やっぱり、また同じだろう、と彼女は思った。

だから、彼女は驚いた。

「ええと、お姉さん？　ぼく、目が見えないからわからないんだ。でも、声がとても綺麗で哀しくて……優しそうだから、きつときれいなんじゃないかな」

少年は、盲目だった。

白い杖は、少年の目だった。

奏でる音楽は、少年の路だった。

その少年にとって、声は顔だった。

だから、その答えは、本当の答えだった。

少年の、本当の、本心から来る、答えだった。

彼女はそのとき、ようやく思い出した。

探していたもの。

待っていたもの。

ソレが何なのか。

彼女はそつと、涙を流した。

流れた涙は、耳元まで広がった大きな口に流れ込む。

しょっぱい味が、次々と口へ流れ込む。

それでも、涙は止まらなかった。

「お姉さん？　どうしたんですか？　泣いてるんですか？」

本心を、偽りの無い本当の言葉をくれた少年が、氣遣わしげに声をかけてくる。

その仕草や氣遣いもまた、嘘偽り無い、本心からの行動だった。

彼女は思い出していた。

今までのことを。

今までやってきたことを。

理不尽な質問を、何度も何度も何度も、他人に強いてきた。

勝手なコンプレックスを、他人に押し付けてきた。

皆、彼女を怯えた目で見てきたけれど、それを強いたのも彼女自

身だった。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

彼女は、泣いて、謝った。

今まで、彼女が、答えを強いてきた人たちに。

許してもらえはるはずが無いことも、もちろんわかっていた。
それでも、これ以外の方法が、彼女には、わからなかった。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

今まで、聞いてきた数だけ、彼女は「ごめんなさい」を繰り返す。
その間、少年はずっと、そばに立っていた。
立ち去ることなく、彼女の気が済むまで。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

何百回、何千回、何万回。

彼女は謝り続けた。

そして、何度目かに、いつか出会った不思議な少女の顔を思い浮かべた。

その少女には、多分今まで出会った誰よりも強く、理不尽を強いてしまった。

ただ、勝手に期待して、何も聞かないうちに、勝手に憤って、いきなり襲い掛かってしまった。

もしかしたらあの少女にも、ちゃんと接していれば、答えをくれたかもしれないのに。

ずっと探し求めていた、本心からの言葉を。

なのに、何も聞かずに、ただ怒りをぶつけてしまった。
だから、強く、強く、彼女は言った。

「ごめんなさい」

最後に彼女は、初めて本心をくれた、本心から『きれい』だと言ってくれた少年を見る。

「ありがとう」

そう言つて、彼女は这个世界から、居なくなつた。

欲しいものは、もう見つかったから。

End Function

「でね、この少年が実はあ——」

そこまで聞いたところで、私はそつと席を立つた。
聞くべきところはもう、聞き終えたから。

昼休み、学生食堂の端っこである。

最近では此処で、巳^{みのり}禱さんと昼食をとるのが習慣になりつつある。
嘶さんとは今日、たまたま此処でばったり会つただけだ。

巳禱さんが同じ中学出身の友人だったようで、自然と同席する事になり、そして聞きもしないのに新着の噂話だと言つて語り出したのである。

すでに昼食は済んでいた。

巳禱さんが、なにやら白地に金糸の刺繍が施された、妙に高そうなハンカチを思い切りぬらして目をつるうるさせている。
感受性が高い子なのだ。

嘶さんも、更なる後日談に熱が入ってきたらしく、私が立つたことに気づいてない。

邪魔をしても悪いので、私は黙って席を離れる事にした。

「……全く、あなたは どうしてそう、折角できた友人から離れるようなことするかしらね」

相変わらず余計なお世話を焼くイオ。

受け応えると面倒なので、私は無視して話題を変える。

もちろん『口裂け女』が消えたという話のことだ。

「どうも何も聞いたとおりでしょ、口裂け女さんは無事成仏なさいましたとき、めでたしめでたし」

ちつともめでたく無さそうな顔で両手を広げるイオ。

自然に『バグ』が消滅したってこと？

「んなわけないでしょ」

はい？

「ヌル・イクセプションに中身を与えていたものが蒸発しちゃったっただけよ。私が正さなきゃいけないのは中身じゃなくて器の方。中身が消えたら器も消えるって訳じゃないわ」

ヌルとは穴のようなモノだと以前イオは言っていた。要するに例えるなら、彼女が行うべき作業は穴埋めという事なのだろう。底に水が溜まっていて初めて人に見える状態になるが、水が蒸発したか라고言って問題の解決には至らない。

ならばしかし、この事態はあまり良い事ではないはずだ。かなり大きな穴を見失ってしまったようなものなのだから。そんな暢気に構えていていいのだろうか。

「良いも何も、消えちゃったんだから、しょうがないでしょう？ どうせ『中身』になりそうなモノなんて他にもごまんとあるんだから、一つくらい、どうってことないわ」

そっというイオは、本当に気にしているような気配は無かった。

割りきりが良いのか、適当なのか。彼女に限って後者は無いか。

それかもしくは、妖精と私たち人間では時間の感覚が全く違うのかもしれない。彼女の自称するプロフィールが正しければ、少なくとも五〇〇年はこの地に居るといふ。いつまでに、という期限が無いのなら、確かに一回逃した程度はさほど意味を持たないのだろう。個々の性格にもよるだろうが、人間で言えばせいぜい電車一本乗り過ぎたとか、その程度 of 感覚なのかもしれない。

もうその必要も義理も無いがなんとなく、さっきの嘶さんの語った事を思い返してみる。

どう聞いても私のことと思われる人物がちらりと登場していたり、その他も近くで見聞きしたとしか思えないようなシーンの描写が多かったり、という点はあえてつつこまない。

だから、口裂け女本人の心情などは、嘶さんの想像による創作だろうし、彼女を成仏(?)させた盲目の少年とやらも実在するのかどうかは微妙なところだ。

もっと言うなら、そもそも『口裂け女』が消滅したという事自体が、そもそもただの創作の可能性もある……筈なのだが、何故かイオは嘶さんの話を当然の事実のように受け入っていた。私個人としてもそうあってくれたほうが都合が良いので何も言わないのだが。

まあ、嘘か本当かはともかくただ退治されたとか、そういう殺伐とした話になるよりは、そういう結果であつたほうがずっと気持ちが良い。

そもそも、元々が噂話から生まれた存在である。

なら、綺麗なエンディングを語ってくれる人がいれば、それは『本当』の事になるのかもしれない。誰だってハッピーエンドのほうが良いだろう。

「でも」

イオが言う。

「今回の埋め合わせはしっかりしてもらわないとね。がんばって頂

戴」

また、無茶を言う。

別に今回の件は私が悪かった部分なんてないはずだった。襲われたことはともかく、結果的には。

そもそも私はイオが仕事効率よくするためのインターフェース兼イクセプションを集めやすくするためのまき餌だったはずだ。何をがんばれと言うのやら。しかも、私には何の才能も無いと断言したのはイオ自身ではなかったっけ？

あまり危ないことに凡人を巻き込まないでほしい。

「大丈夫っ！ 黎ちゃんにはあたしがついてるわ！」

ガバリ、と後ろから覆いかぶさるように抱きつかれて、大きくよるける。

正直言つと、不意打ち過ぎてかなり驚いた。心臓に悪い。

もはやそろそろ慣れの境地に達してもいい奇襲なのだが、残念ながらこの不意打ちはどうがんばっても回避しようが無い。

何せ彼女はその体質上、四六時中意識でもしていないと思わすっかり居なくなってしまうから。なまじ、武道の心得もあるっぽい識視さんは、気配を消すなんてアクション漫画のキャラクターみたいな芸当も当然のように出来るのでタチが悪い。

いつから居たんですか、とココ最近すっかり挨拶となっている問いを投げる。何か聞かれたそうな顔をしていた……様な気がしたので。

「今日のお弁当、にんじんの入った卵焼き！ あれ美味しかったよ！」

それはあれですか、一週間に及ぶ個人的人参フェア開催中だった名残で、既に完全に飽きが来ていたのに、早々に処分すべき在庫があったのを鑑みて、とりあえずかき回していた溶き卵に放り込んで厚焼きつぽくし、今日の弁当の端っこに詰めておいたおかずのことですか。

急場の残飯処理つぽいノリでやったただけなんだけど、ご好評のよ

うで何よりです。味見したときは、人参にうまく火が通ってなくて微妙だった気がするけど。

はてそういえば、弁当箱の片隅に入れた記憶があるのに、昼食時自分で食べた記憶が無い。

この人やっぱり、いろんな意味でそんじょそこの都市伝説よりよっぽど怖い存在かもしれない。

なにやら変な汗が出てきた気がして、少しわざとらしくもがく。離れてください、歩きにくい上に暑いです。

制服が夏服に衣替えしてもうすぐひと月が経つ。初夏といってもいい気候なのだ。他意はない。

「つれないなあ、スキンシップって愛情を伝える最もダイレクトな表現なのに、どうにも黎ちゃんには伝導率が低いようね」

……全く。

この街へ来てからというものの、何の因果か奇縁か、変な人ばかり遭遇する。追隨するように面倒な事件まで運んでくるからたまらない。

身の芯から怠け者な私にはあまりにもハードすぎて息切れを起こしそうだ。

特にこの二人は、どうも言動がイチイチ正直過ぎて対処に困る。

嘘を吐かない、というわけではなくせに、決して偽らないという器用な事を平気でする。

それが私にとっては微妙に暑苦しく、微妙にこそばゆい。

正直言えば、やはり悪い気はしない……けど、真似は出来ない。

私はそこまで素直でも、垢抜けても居ないのだ。

あの口裂け女も、この人たちに出会っていれば、もっと早く自分の探していたものを得られたんじゃないだろうか。

この二人は、人の内面を見通す事にやたらと長けているのだ。それに滅多な事で物怖じしない。口裂け女が抱えていたコンプレックスなど、馬耳東風として、素直にその内面をみて指摘しただろう。

自分達はやたらと整った容姿をしているくせにどちらも無意味に

邪気がないから、多少の気障な発言も皮肉に聞こえないだろうし。

本当に、真似出来ない人達である。

なんでこんなのが、よりもよって私なんかにくつついているのか、よくわからない。

聞けば多分応えてくれることだろう、本心からの言葉、或いは行動で。

もちろん、私はそんな事を自分から聞いたりしない。そんな自意識は持ち合わせていないし、なんとなく答えを聞くのが怖い、いろんな意味で。

ふと、イオと目が合った。

つらつらと上記のような事を考えていたので、なんとなく見つめるような形になってしまう。

「ん？ なぁに？」

面白そうな顔でこっちを見るな、なんでもないから本当に。

「ふむ？」

聡い彼女は、一体何を悟ったのか、さっと目を逸らした私の顔をじろじろ観察してから、空中でくると旋回して目の前に躍り出る。舞台役者みたいに両手を広げて、何かを披露するかのような仕草。彼女のお決まりのポーズだ。

そしてふいに、こんな事を聞いてきた。お得意の悪戯っぽい笑顔で、

「わたし、きれい？」

……なんて自意識過剰な妖精だろう。

私以外には、ごく限られた人にしか姿が見えないくせに。

正直に言うのは、なんだか癪だった。だから私は少し考えてこう言った。

——わかりません、と。

*** Sub New (その手を引いて)

古今東西老若男女、今も昔も洋の東西を問わず、老いも若きも男も女も、あらゆる時間、あらゆる場所、あらゆる関係性の中で『イジメ』と言うものは無くならない。

まるでそれこそが『人間』なのだと言わんばかりに、ソレは人と人の間に巣食っている。

特に、小中学校という環境では顕著だ。小学校高学年から中学の一、二年生までの間にただの一度もイジメに関らず過ごす人間は全体の一割にも満たないと言う話もあるほどだから、それがいかにありふれた日常であるかは推して量らなくても明白だ。

とは言うものの、そこから抜け出すのは、実はそう難しいことではなかったりする。

加害者であるならば、謝って手を引けばいい。
傍観者ならば、そつと手を差し伸べればいい。
被害者だったなら、ただ助けを求めればいい。
けれど、

『助けを求める』

という行為は、弱々しさや情けなさを自他共に感じさせてしまうモノだ。

故こそ、それは大きな勇気が必要になる。恥ずかしいだとかそういう感情的な意味でももちろんそうだし、多分本能的な意味でも同様だろう。弱さを他者に見せることには大きなリスクが伴う。

だから「弱さを他人に知らせる強さ」を手に入れることが助求の声を発するための第一歩になる。

でも、これがどうしてなかなか難しい。

……難しいとは思えない人も、居るかもしれない。それは誇るべきことだと思う、必要な強さを持っている証拠だから。

でもやっぱり、強く在れない者も居る。

助けて欲しい、この手を引いて、救い出して欲しい。

そんな言葉が胸の内にのみ響いて、外には出ていかない。

運が良ければ、そうして耐えているうちに解決……まではいかなくとも有耶無耶の内になりを潜めることはある。そういう意味で、私はやっぱり、今も昔も悪運だけは強かったということだろう。

『彼女』もそんな、一縷の光を待ち続けていたに違いない。

「誰か助けて。ワタシの、手を引いて……」

そんな言葉を胸に秘めて。

——その日、私は【ヒキコさん】に遭遇した。

「……………」

眼前に佇むソレを、私は呆然と見上げる事しか出来ない。

人……女性の形を辛うじてしているが、どうみても人間ではない。まず二メートルもかくやという異常な上背である。覆いかぶさる様にして至近からこちらを見下ろす姿には異常な圧迫感があり、梅雨明け後のやたらぬるい雨を、それを滴らせている淀んだ空こと背負っているのではという錯覚を起こさせた。

目じりと口角が左右ともこめかみ付近まで、カッターか何かで無理やり切り開いたかのように裂けていて、零れ落ちそうな眼球は血走りすぎて白い部分が無い。唾液と思われるいやに粘性の高そうな液体でぬらぬらとした口もとには、明らかに虫の羽やら足やらと思われるものがこびり付いていて、虫嫌いの私は見るだけで鳥肌が止まらない。

女性型の幽霊や妖怪達のマジョリティーに反して、長い前髪などで隠されていない様子は間違いなく異形のそれだが、私はなぜかそこに、恐怖や憎悪と言うよりは痛切な印象を感じていた。

***Sub 1（ヒキコさん）

七月も初週が終わろうと言う週末。

昼夜の平均気温はじわじわ上昇して季節の移ろいを感じさせるのに、波に揺られてたゆたう昆布みたいに、高気圧にあおられて上下する梅雨前線はなかなか本州上を去ってくれない。

おかげで日々の不快指数は正の二次関数グラフみたいに、日付を追うごとに急上昇している。湿度はすっかり飽和状態になってしまつて気化熱による涼も期待できず、早くも酷使され始めた各家庭の除湿装置は際限なく入り込んでくる湿気の量に圧されて、そろそろ自分が除湿機なのかそれとも蒸留器なのかという哲学の路を開き始める頃だろう。家電に愛だの知恵だのがあれば、だけれど。

そんな時分。

私はと言えば、普段の五割増でヒキコモリになっている。

先月の反省を踏まえ、最低限必要な用事は下校時に済ませるよう心がけた。おかげで夕飯の材料調達のために夜出歩かなければならないような事態に陥ることはなく、ここ二週間ばかりは学校から帰宅後一步も外へ出ない生活をつつがなく継続中。イオの神楽鈴を振り回すかのような小煩い説教染みた文句が日々絶えないことに眼を瞑れば――耳を塞げば、それなりに快適な怠惰な毎日だった。

だから、すっかり油断していた。

或いは心の何処かで高を括っていたのかもしれない。――夜出歩かなければ問題ないと。

姿自体は、実はかなり距離がある段階で確認できていた。

見咎めた段階で速やかに踵を返していれば、今日も平和に過ごせていたかもしれない。柄にも無く、中途半端に顔を出してしまった好奇心が私の足を止めてしまった。

私の生活圈たる百年桜市北東部には市の外周を沿うように川が流れている——というよりはその大部分がそのまま市境線として機能している。

必要な買い物は出来る限り通学路上にある商店で済ませたいところだが、どうしてもそろわないものは間々出てくる。そんな時によく利用するスーパーからの帰り道に、私はいつも川沿いの土手の上に敷かれた小道を歩くことにしている。

その道を利用すると、実は少し遠回りになるのだが、周りに高い建物が殆ど無い河川敷と言うこともあって見晴らしがよく、私の気に入りの散歩コースなのだ。

連日の雨で水かさの増した川を土手の上から眺めていたときに、私は『ソレ』を見つけた。

最初は見間違いかと思った。

何せ、殆ど氾濫寸前にすら見える濁った川のすぐ横を人が走っていたのだから。

しかもなにやら大きな袋のようなものを引きずっていて、しかもそれが重たい所為なのか身体を殆ど横向きにして蟹歩きならぬ蟹走りとも言つような状態なのだ。そんな状態であるにもかかわらず、遠目に見ても判るくらいにかなりのスピードで猛進しているのだから、この時点でもう明らかに異常だった。

だから異常だと気づいた時点で、私は視なかったことにして即刻回れ右をし、ダッシュで逃げるべきだったのだ。そうしなかったのは、やっぱり迂闊だったとしか言いようがない。

——なんだ、あれ？

と、意識せずに漏れてしまった声は雨や川の音、そして距離も相

当あつたため『ソレ』には絶対届かないはずだった。

……のだけれど、まるでつきりと聞こえたかのようなタイミングで『ソレ』は猛走する足をぴたりと止めて、ぐるりと顔を振り向けたのだ。

まっすぐ、私の方へ。

やばい。

そう思つて踵を返したのと『ソレ』が猛然と土手を駆け上がり始めたのはほぼ同時だった。

「ちよつと、待ちなさい！」

定位置たる私の右肩付近でイオがそんなことを叫ぶ。無茶を言うな。

もつ少しおとなしそうに見えたなら、まだそれがどんな存在か見極めるくらいの余裕は提供できたかもしれない、が、あんな超アグレッシブそんな存在を前に悠然と構えていられるほど、私の腰は軽量化されていない。

正直なところ、私自身走り出した時点でもうだいぶ手遅れだったことを迫りくる気配——というか漫画なら確実に『ドドドド』みたいな擬音語が付けられそうなすごい足音——でひっしと感じていくくらいである。むしろ「よくぞ踏みとどまった」と褒めて欲しいくらいだった。

「いや、だからそういうことじゃなくって、あれはっ——」

とイオが何かを言いかけたところで、私は丁度土手を降り切っていた。そして、

——ドシャリ

という重たい肉の塊が落ちてきたような音が聞こえた。

前から。

.....。

そこには見上げんばかりの大女が立ちはだかっていた。続けてべ

しやりと音を鳴らしたのは彼女が持っていた大きな袋……に、遠目には見えていたものだ。ふと目が行って、それが何かかった瞬間、私は口を押えて思わず呻いた。

人間の、おそらく大きな的に子供の――死体である。

もつとも、そうだと気づいたのは大女の手握られているのが人の足の形だったからである。それより先、ずつと引きずられていたであろう部分はスタボロになった大きな肉塊だった。

ところどころ付着している布きれは着ていた服のなれの果てか。

腕らしい部分は見つからなかったが、頭だったであろう部分は髪の毛らしきものが付いていてかろうじて判別できた。握りつぶした空き缶を連想するような状態で顔など判別できる状態ではなさそうだったけれど。

というか、まじまじと見ていられず、すぐに目を逸らしたので委細はわからない。

というか、目を逸らした瞬間、大女が逸らした方へ即座に回り込んで来てついでにパーソナルスペースをがっちり踏み抜かれてしまったために身動きができなくなり、それどころではない。

というか――なにこれもう詰んだじゃん。

立ち位置の距離は三十センチ未満。

ほとんど真上にある大女の異貌は瞬きもせず、文字通り真っ赤に充血した目で私を見下ろしている。私はもうその目を見つめ返すくらいしかできない。

流れの滞った沼地のような生臭さが鼻につく。

曇天から滴り落ちてくる水滴が大女の髪を経由して口元を汚していた唾液や虫の残骸を溶かし、重力の手に捕まった端から地面へと引っ張られていく。

結果として少しずつ洗い流されて大女のすっぱんが露わになった。意外なことにずいぶん若々しい肌質をもっているようだった。口角から頬、目じりからこめかみへ走る裂傷がなければ、もしかすると結構な美貌の持ち主なのかもしれない。

異常なのか正常なのか、こういう、もう自分の能動的な行動が無意味な状況になると私は頭の半分くらいが冷静さを取り戻すらしい。こんな状況にもかかわらず、大女の顔を観察していた私の脳みそ半分はそこに、不自然な感情を見出した。

共感……或いは、同情。

それは人を襲う側に立つ者が持つには少しばかり不可解なものだった。

「……………」

お互い無言の睨み合い、というより見詰め合いが続く。

かなり長い間そうしていたように感じたが、雨脚と己の濡れ具合からして、実際は何分も立っていなかった。というのは後で指摘されてから気づいたことだった。

覗き込むようにして停止していた大女の体がぬらりと動いた。

ついにデッドエンドか！？ と身構えかけた私だったが――

大女はそのまま私に対して何をするでもなくゆつくりと踵を返し、そのまま住宅街の方へ先ほどと同じ蟹走りの要領で走り去っていった。

いや、いこうとして――

「えいつ」

「っ！？」

突如横合いから登場した女性――識視さんの投げたナニカに触れたかと思うと、霧か霞にでもなったようにその実態をほどき、そして実にあっけなく消滅してしまった。

……え、なにごと？

「はろはろー！ 黎ちゃん、草葉の陰から愛してるー」

何キャラだろう。というかいつそ誰だっけ？ 草葉の陰からってことは故人かな。存在感が薄いからうつかり名前も顔も忘れちゃったのかもしれない。

「確かに、わたしは表向きには故人よね」
そうでしたね。

それよりも今いったい何が起こったんですか、何をしたんですかと聞くべきだろうか、あれはなんだったのかと聞くのが先かな？

「【ヒキコさん】、ですね」

「正解」

識視さんの解答とイオによる答え合わせが二言で終了した。

これだから天才とチートは。

しかし、【ヒキコさん】？ うん、聞いたことがない。

「そうね、伝統的というほどではないけれど、知名度はそこそこある都市伝説よ」

とイオは言うが無尽蔵に近い知識を持つ彼女に「そこそこ」と言わしめる知名度とはどの程度のものなのやら。

「ここ十数年で台頭してきた、かなり新しい現代妖怪なのよ」

そして当然のように知っている識視さん。

もちろん、その程度では知名度に対する疑念は拭えない。この人も基本的に生き字引だから。

「足を持って学校中を引つ張りまわされるっていう、酷いイジメを受けていた女の子が、後に不登校になったり親の虐待を受けたりと紆余曲折の果てに怪異化したもので、雨の日になると街へ彷徨い出てきて気に入った子供を見つけては捕まえて、ズタボロの肉塊になるまで引つ張りまわすんだって」

昔見た心霊特番の受け売りだけどね、と識視さんにしては珍しい注釈を加える。……気を使われたんだろうか。

それは兎も角。

やり口がかなりエグイ妖怪である。

なまじ恐怖と痛みがしばらく継続しそうなあたり、口裂け女より性質が悪い。口裂け女の発生原因は基本的に自己へのコンプレックスだったけれど、【ヒキコさん】とやらは聞く限りイジメや虐待らしい。そういう違いが、行動の凄惨さに響いてくるんだろうか。

何にしても、助かってよかった。そして知らなくてよかった。今話を知っていたら遭遇していた時にもっとパニックに達しない。

それで下手な行動をして餌食になったのでは目も当てられない。

……あれ？

なんで私助かったんだろう、今さらだけど。

そもそも存在自体の知識がなかったから対策なんて知る由もないし、逃げて追いつかれて棒立ちしていただけたから偶然正解の撃退法が実践できたなんてのも考えにくい。

とすると当然の帰結として思い当たるのはやはり、【ヒキコさん】消滅の直前にタイミングよく出てきた識視さんだ。今回もまた、私は全面的に助けられたということなのだろう。

と思つて謝意の視線と言葉を贈ろうとしたのだが。……あれ？

なんかイオと識視さんがそろつて変な目を向けてくる。その目に宿る感情はどちらも似たり寄ったりだが、イオのイエローダイヤモンド的な瞳から放たれる視線がすごく気に入くない。なにその憐みと慈愛に満ちた視線は、前者はせめて隠しておいてよ。

ふと肩や髪を密やかに濡らしていた雨が遮られる。見るといつの間にか私の後ろに立っていた識視さんが、私の取り落とした傘をさしてくれていた。

一つの傘に二人で入る都合だろうか、そつと優しく私の肩を抱くようにして密着してくる。

……なんだこの無駄にメッセージ性を帯びた立ち居振る舞いは。気温や湿度とは別に不快な生ぬるさを感じるのは私の気のせいだろうか。

「レイ、【ヒキコさん】の撃退法とされている手段は、大きく二つあるわ。一つは鏡を見せること。彼女は自分の醜い姿を見るのを嫌うらしく、そうやって鏡で映してやると逃げ出すそうよ。二つ目は『ひっぱってやるぞ！』と言うこと。きつとトラウマを刺激されるのでしょうね」

なにやら神妙な面持ちでイオがそう説明する。

なるほど聞く限り、どちらも特別意外性のない弱点である。

鏡なんかは都市伝説なんかに限らず怪談から神話に至るまで、あ

らゆる不思議な話の中でキーアイテムとして取り上げられている物である。逃げ出す理由も女性型の——特に元が年頃の少女だった妖怪であることを考えればいつそ素朴だと言ってもいい。

二つ目に関してもいかにも都市伝説風味がする。そもそも自分の根幹に関する言葉なのだから反応しない方が逆におかしい。聞いただけで逃げ出すほどトラウマになっている行為を自分自身で行使しているという矛盾というか不条理というか、そういうチグハグさもテンプレート的だ。

しかしならなおのこと私がこうして五体満足に立っている理由がよくわからない。

鏡も、それを代用できるような品も持っていないし撃退の合言葉だって発していない。方法を聞く限り、少し離れて身を潜めていたらしい識視さんにも、例え用意があったとしても代行は出来なかったように思える。

——いや、待った。

見たじゃないか、私は。

識視さんが何かを投げつけ、それを受けた【ヒキコさん】が瞬く間に消滅したのを。あれが今イオの説明の中に無かった第三の裏技的なものだったんじゃないのか。

「ああ、アレはほら、コレよ」

わざわざ伏せていたものだからてっきりもったいぶるのかと思ったのだが、あっさり識視さんが問題の品を見せてくれた。

それは毛糸で編まれた親指大の小さな人形だった。

一見何の変哲も無いように見える。金具や紐でもつけければキーホルダーやストラップに出来そうな、手作り感満載の編みぐるみであった。………というかコレこの間イオに言われて私が作ったやつじゃん。

「そうよ、このために作らせたんだから」
まじで。

絶対その場の思いつきで見たがっただけだと思ってた。

確か、【口裂け女】の件が流れた直後くらいだったはずだ。

どんなきつかけでその話題が出てきたかは忘れたけれど、私が小さいのなら作れると言ったら唐突に「それよ！」とのたまひ、今やれ直ぐやれあしろこうしろと、散々横から口を挟んで強引に作らせたのである。そのくせいざ出来上がったら「ああ、その辺置いといて」という態度だったものだから絶対飽きたものだとばかり思っていた。

「失礼ね、名誉毀損よ。私は『後で見るから、そこへ置いておいて』と言ったのよ?」

大して変わらないよ。言い方が受け取り方のニュアンス誤差範囲だ。

まあ、そのことはもういい。

それよりも、そんな私が手作りした人形が【ヒキコさん】撃退グッズとして作用するものなのだろうか。

「なんか勘違いしているみたいだけれど、その人形は【ヒキコさん】撃退アイテムじゃあないわよ?」

……うん? 話が見えない。実際さっきはそれで【ヒキコさん】消え去ったのだ。

「撃退したわけでも、ましてや消滅させたわけでもなくてね、その人形に閉じ込めたのよ、一時的に。その人形は『ヌル』由来の都市伝説を少しの間格納しておけるの」

『ヌル』を?

『ヌル』と言えば、まさにイオが回収の任を持っている世界のバグのことで、噂や都市伝説が世界に現界してしまうそもその原因のことだ。

と、言うことはもしかして『ヌル』由来の現象はすべてコレで対処できると言うことに? 何か都合が良すぎる気がする。しかも見たままなら投げてあてるだけで作業終了。某ポケットに入れてモンスターを持ち運ぶゲームで似たようなアイテム見た気がする……

「そんなお手軽万能兵器じゃないわよ。ある程度手順を踏まないと

格納は失敗するわ」

ちゃんと見ていたわけじゃないけれど、識視さんが使っていたときは特に何かしていたようには見えなかったが……。

「簡単に言えば相手が弱っている状態でないとうまくいかないのよ。例えばさつきみたいに都市伝説が相手なら、その対抗策をちゃんと踏襲してダメージを与えるなり、逃走させるなりしないとだめなわけ」

……あれ、ますますどっかの怪物捕獲ボールに特徴が似ているような。

そういえばもう今さらだけどなんで識視さんが持ってたの？

「貴女持つてても有効に使えないでしょう、どうせ」

失敬な。

あらかじめ今聞いたことを教わっていればやりようくらいはあるだろう。たぶん。

「本当はそうするつもりだったんだけど、気づいたらもう識視が勝手に持ち去った後だったから。ま、試用という意味でも結果オーライだったわね」

さて、この場合私はどういう切り口で誰にツッコミを入れるべきなのだろうか。

ストーカー規制法という名の投網を打ったらとんでもない大物がかかる気がしてならないのだけれど。とか今さら言っても普段通りなだけで不毛である。しかし私の単なる自意識が過剰でないという弁護のために一つ打ち明けるが、さつきからずっと私は識視さん以後ろから抱きしめられている格好なのである。身動きが取れない。

というわけで、もう言っても仕方がないことはスルーしよう。消去法で、私が今突っ込むべき、聞くべきことは一つだけだ。

なぜ【ヒキコさん】は何もせず去ろうとしたのか。

最初は「気に入った子供を」捕まえるという特性を聞いて、単に

そのお眼鏡に合わず済んだだけなのかとも考えたが、人形の効果がこうしててきめんに発揮されたのを見、人形の用法を聞いた後ではそう無暗に樂觀できようはずがない。

つまり、私が無意識にした何かが作用したのか識視さんが密かに何かしていたのか、或いは何がしかの状況が偶然合致した結果なのか。いずれにしろ何かしらの撃退策か回避策が発動したのだ。すでに私の与り知らぬところで解決をみてしまったとはいえ、何も知らないままなのは少々気持ち悪い。今後のための参考になるかもしれない、という珍しい——自分で言うのも何だが——前向きかつ意欲的な気持ちもあった。

だから、私は結構真面目に尋ねた。

だというのに。

「ああ……うん、そうね。実はまだ言っていないことが、無いではなかったわね」

「大丈夫よ黎ちゃん。これからはずっとわたしがあなたを守っていくから……」

降ってる雨が飴にでもなるのではないかと思うくらい珍しいく歯切れの悪い弁を立てるイオと、たとえ飴が降るうとも揺るがぬだろう、やたら重たい心のこもった意味の分からないことを言っている識視さん。締め付けが苦しくなってきた。

さておきなんだこの生ぬるい空気は。

「【ヒキコさん】には追い払う方法以外に、襲われない条件というものがあるのよ」

でしようね。それを訊いてるんだけど？

「撃退法と同じく大きく二つあるわ。一つは、かつて人であった時に自分をイジメていた子供と同じ名前だった場合。まあでもこれは定説がないから、言っておいてなんだけどこの条件は殆ど無いに等しいわね。だからあなたが該当した条件はもう一つの方よ」

……何故か、やけにもつたいぶるイオ。

その理由が判らない私は——そもそもだからこそ尋ねている——

怪訝そうな顔をいつそわざとらしく作るべく眉根を寄せて首をかしげる。

「いじめられっこ」

観念したように言ったイオの言葉は簡潔だった。

「過去、或いは現在。他人にイジメを受けたことのある人、受けている人を【ヒキコさん】は襲わないのよ」

……………ああ、なるほど。

確かに、私は過去にそういう経験がある。

と言つても、昨今のバラエティー番組が面白おかしくセンサーシヨナルに紹介するような惨たらしい、文字通り劇的なものなんかじやあない。

深刻なケガをしないレベルの暴力だったり、物を取られたり、避けられたり、その程度だ。

ジェンダーの堺がまだそれほど顕著じゃなかった時期というものもあつて、陰湿になりやすい女子同士のアレソレだったわけでもない子供同士のふざけ合いが少し行き過ぎたという、それだけのことがある。

そりゃあ、当時は辛かったけれど今振り返ってみれば……………まあ、可愛いもの、だなんて言つてやるほど私は聖人君子ではないけれど、世の深刻なそれらの渦中に居るかもしれない人たちのことを思えば、取るに足らないとこだったと言えないでもない。

その経験のおかげで今命拾ひしたのだと思えば、いつそ儲けモノだと言つてやろうじゃないか。

積極的に思い出したり話したりしたくないことではあるが、もう過ぎたことだ。私としてはもう後を引いているつもりなどない。

だから――

――識視さん、私の骨格が変形しないうちに、腕をほどいてくだ

21°

(2 / 2)

***Function 1 (いっしょに) as 嘶心縁

最初の頃は幸せだった。

みんなより背が高いことが少しだけコンプレックスだったけれど、
クラスの間みなはとても良くしてくれていたし、だから仲の良い友
達も一杯出来た。

勉強も楽しかった。

成績が上がればお父さんもお母さんも先生も褒めてくれたし、友
達も「すごいすごい」と言ってくれた。

すぐにクラスで二番目になった。

クラスでいつも一番だった ■ ■ くんは「おれがいちばんだ！」と
言って友達をこき使ったり、給食のプリンを独り占めしようとした
りしていたけれど、わたしはそんなことに興味は無かったからきに
しなかった。

そしてあるとき、わたしがクラスで一番になった。

お友達はみんな「すごいね、やったね」と一緒に喜んでくれたけ
れど、 ■ ■ くんはすごく怒った顔でわたしのところに来て「次は負
けないからな！」と言った。

でも、それからずっとわたしは ■ ■ くんとはあとちよつとの差で
一番だった。

テストのたんびに ■ ■ くんはわたしのところへやってきたけれど、
いつもわたしの勝ちだった。

毎日のように「次は負けないぞ」という■■くん、競争するつもりがないわたしは「お互いがんばろうね」と言った。

その日、わたしは掃除当番だった。

同じ班には■■くんも居て、とてもめんどくさそうにしていた。わたしを含めた班員達と一緒に「さぼったらだめなんだよ」と言っても聞いてくれなかった。

そうやって掃除の準備をしていたところ、担任の先生がやってきて言った。

「森さん、お手伝いをお願いしますか」

わたしは「いますぐですか」とたずねた。わたしは掃除当番の班長だったから。

「はい、お掃除は■■くんにお任せして、こつちをお願いします」
わたしは先生に言われたとおり■■くんにホウキをわたした。
先生のお手伝いは、職員室と一緒にプリントの整理をすることだった。

次の日から、学校は地獄になった。

最初はきづかなかったけど、数日もするとわたしがみんなから避けられていることは疑いようもなくなっていた。

『森妃姫子は先生にヒイキされてるから成績がいいのだ』

そんな噂が流れ始めたから、らしかった。

もちろん、全く身に覚えがなかったけれど、誰も信じてくれなかった。

友達だと思っていた子も、みんな離れていった。
わたしは疑いを晴らそうと思った。

私は今まで以上に勉強を頑張った。

ヒイキなんてなくても成績がいいというところを見せれば、信じてもらえると思ったのだ。

ちようど、遊んでくれる友達がいなかったから、勉強する時間はたくさんあった。

勉強をいっぱいしたおかげで、成績はますます上がった。

お父さんもお母さんも一層ほめてくれたし、先生もとても感心してくれた。

でも、クラスメイトの疑いはちつとも晴れなかった。

それどころか、ますます疑いは深まったらしかった。

悪口を言われたり、持ち物が壊れたりなくなったりし始めた。

きつと、努力が足りなかったんだと、わたしは思った。

そうしてわたしは、学年一番になった。

朝礼会では校長先生に賞状をもらった。

お父さんもお母さんも「自慢の娘だ」と言ってくれた。

今度こそ、わたしはみんなの疑いを晴らせると思った。

賞状をもらったその日、私は■■■くんのところへ行った。学年が変わって、クラスが別になっていたから。

わたしの疑いが■■■くんが広めたものだということは最初のころから知っていた。

だから、■■■くんの疑いを晴らせばみんなの疑いも晴れると、わたしは思っていたのだ。

彼の姿を見つけてわたしはすぐに、もらった賞状を見せていった。
■■■くんは前みたく「次はまけないからな」と言ってくれると思

っていた。

でも、それはまちがいだった。

■ ■くんはわたしと賞状を見るなり、すごい怒った顔になって、わたしから賞状を取り上げると、あっという間にビリビリにやぶいてしまった。

わたしがびつくりしていると、■ ■くんはやぶいた賞状をわたしに投げつけて言った。

「そんなにヒイキされたいのか！ ならお望み通りにしてやるよ！」

わたしは「ちがうよ」といったけれど■ ■くんはお構いなしにわたしを突き飛ばした。

たまらずしりもちをついたわたしの足を■ ■くんは強くつかんで言った。

「ヒイキのヒキコ。思う存分ひっぱってやるよ！」

わたしはそのまま、学校中をひっぱりまわされた。

最初はスカートがめくれてはずかしいとおもったけれど、すぐにわからなくなった。

廊下を曲がったり階段を下りたりするたびに顔や頭や背中や肩や腕や、いろんなところをぶつけた。

痛くて痛くて、たまらなくて、わたしは途中から泣き叫ぶしかできなくなっていた。

気づいた先生が助けてくれたときには、わたしはすっかり傷だらけになっていた。

腕は両方とも変なかたちになって動かなかったし、顔もまるでオバケみたいになっていた。

その日から、わたしは学校へ行かなくなった。

■くんは先生たちからたくさん怒られたらしいけれど、それだけだった。

わたしはもう■くんがこわくてどうしても学校にいけなかった。家からでもたくなくて、わたしは毎日お部屋でぼーっとしているようになった。

勉強しようと思ったけれど、手が痛かったからやらなかった。痛くなかったら、また勉強しようと思っていたけれど、なかなか治らなかった。

そうして何日も勉強せずに部屋に閉じこもっていたら、ある日お父さんがやってきて言った。

「なにをしているんだ、学校へ行って勉強しなさい」

わたしは「いたいのはいやです」と言った。

お父さんは怒った声で「なさないことを言うな。勉強しなさい」と言って持っていたコップをわたしに投げつけてきた。

中に入っていたお水がこぼれた。お部屋の中がお酒のにおいで臭くなった。

次の日の朝、またお父さんがお部屋にやってきた。

「さあ、学校へ行くんだ」わたしは「いやです」と言った。

すると、ベッドからはみ出していたわたしのあしをお父さんがつかんでひっぱった。

「さあ、出てきなさい、学校の時間だぞ」

わたしは必死に近くにあるものへ手を伸ばしてつかまった。

でも手が痛くてうまくできず、わたしは引きずられるまま玄関まで連れて行かれた。

たまらずわたしは大声で泣き叫んだ。

わたしはますますお部屋にひきこもった。

どうしてもお部屋から出てこようとしないうわたしにお父さんは毎晩のように怒った。

「勉強しない子にはご飯をやらないぞ！」

そういつて部屋にやってくるお父さんは、いつもお酒くさかった。

そうしてほんとうに、わたしはご飯をもらえなくなった。

おなかですいて何か食べたいと思っても、もうお部屋を出るのも怖かったわたしはどうしようもなかった。

ひもじくなったらわたしは、雨の日に窓の外へビニール袋を出して水をためて飲んだ。

でもそれだけではやっぱりひもじかった。

ある日、夜に電気をつけて窓をあけていると虫が入ってくると気づいた。

わたしはそうやって入ってくる虫を捕まえて、食べてみようと思いついた。

苦かったりチクチクしておいしくなかったけれど、それでも少し元気が出た気がした。

しばらくそうしていたら、ある日それに気づいたお母さんが悲鳴を上げた。

「きもちわるい」と言ってわたしをぶった。

痛かったようなきがしたけど、なんだかよくわからなくなってい

た。

その日から、おかあさんは毎晩、わたしのへやにご飯とお水を投げ入れるようになった。

けれどもう、食べなれた虫のほうがおいしいようなきがして、わたしはご飯には触らなかつた。

放っておいたらご飯は腐つたけれど、そこに虫が寄ってくるのでたすかつた。

水は、雨が降らない日はたすかつた。

しばらくそうしていたら、久々にお父さんがわたしのへやにやってきて「なんだこれは」と叫んだ。

ずっと中を見ずにご飯と水だけ投げ入れていたお母さんも、その声につられて顔をのぞかせた。

そうしてわけのわからないことをめちやくちやに叫んで逃げに行った。

お父さんもおびえたような顔をしていたけれど、お母さんみたいに逃げ出さなかつた。

変わりに部屋に入ってきて、言った。

「ばけものめ！　でていけ！」

お父さんは、わたしの足をつかむとものすごい勢いでひっぱった。抵抗する元気がなかつたわたしはされるがまま、壁や階段に体中をぶつけた。

そうして玄關に辿り着いたお父さんは、わたしをそとへ放り出して言った。

「どっかへいってしまえ！　ばけものめ！」

家に入ろうとしたお父さんの足を、わたしはつかんで止めた。

外はこわいから、外に出されるのはこまるのだ。

お父さんはわたしのてを放そうと、わたしの手や顔をいっぱい蹴った。

しばらくひっぱりあいをしていたら、いつの間にかお父さんがころんでいて、わたしが立っていた。

ころんだまま必死に家に入ろうとするお父さんを、わたしは必死に捕まえていた。

すると今度はうしろから、玄関の外から悲鳴が聞こえた。お母さんの声だった。

振り向くと、変な顔をしたお母さんが雨の中立ち尽くしていた。

お父さんをつかむ手と反対の手をお母さんへ伸ばすと、なぜかまた雨の中へ走り出してしまった。

とつさにわたしは、お母さんを追いかけて走り出した。

ずっと走ってなかったからうまくはしれなかったけれど、お母さんは運動がにがてだったらしく、すぐ追いついた。

わたしがお母さんの手をつかむと、驚いたお母さんはころんでしまった。

けがをしていないか心配になってわたしはお母さんをのぞきこんだ。

お母さんはわたしと、わたしが手に持っているモノを見ると、またわけのわからない声を出した。

立ち上がれないまま這ってどこかへ行こうとするお母さんの足を、わたしはつかむ。

外はこわいから一緒に帰ろう？

そのとき、遠くから誰か聞き覚えのある声が聞こえた。
なんだかそれは ■ ■ くんの声だったような気がした。
そう思ったとたん、わたしはとても怖くなった。
わたしは、声が出た方と反対側の道へむかつて走った。
手に持っていたモノがとても重たかったけれど、わたしは必死で
走ってにげた。

いっぱいはしって、たくさん遠回りをして、ようやくお家に着いた。

玄関はあいていたのでそのまま中にはいった。
手に持っていたモノは重たかったので部屋のすみにおいて、わたしはベッドの上で丸くなった。

どうしよう、こんな近くに ■ ■ くんが来るなんて。
これでは怖くてお外へいけない。

わたしは頑張って考えた。そして思いついたのだった。
お外へ出るときは、誰かに一緒にきてもらえばいいのだ。と。
最初はお父さんかお母さんについてきてもらおう。
慣れてきたらほかの人と一緒に歩いてもいいかもしれない。
でも、念のため雨の日だけにしておこう。

■ ■ くんはお外で遊ぶのが好きだったから、きつと雨の日はある
まり会わずに済むかもしれない。

*** End Function

——え、終わり？

「うん」

尻切れトンボ過ぎる。むしろ疑問がより一層増えたくらいだった。
「これ以上の噂話は聞いたことないなア……」

まだ噂話だと言いつけるのか嘶さん。……いや別にいいけれども。

「怪異化の経緯は何となくわかったけど、やっぱり今の形になった
目的がよくわからないわね」

「ってーか、とちゅうから支離滅裂で意味わからん」

「ヒキコモリになったあたりからもう精神的に狂っちゃってるんで
しょう」

「あたまトンじゃってんじゃ、動機だの目的だのそういうロジカル
な事言っても意味ないじゃん」

確かに今聞いた話のとおりであるならば、何かの目的に囚われた
末路というよりはなんだかなし崩しのに人の路を踏み外しちゃった
ように思える。正直どの辺までが人間で、どこから妖怪なのかかな
り曖昧だった。

知り合いでもなんでもないから事情に深入りしようという気もな
いが、ここまで聞いて解無しという結論もなんだか不完全燃焼であ
る。まあ、私が物事燃え尽きるまでやり遂げたりすること自体宇宙
法則レベルであり得ないことだから、おあつらえ向きといえはその
通りだ。……うん？ イオはもしかして全部知ったうえであえてそ
う言ったのか？

目を向けてみるが、雨上りの陽光を拡散させる葉上の雫みたいな
輝きを放つ姿は寸分たがわず正常運転で、たまに見せる底意地の悪
さは今ばかりは表出していない。識視さんと架折さんの会話を面白
そうにも面白くなさそうにも見えるニユートラルな表情で眺めてい
る。

「……引つ張って欲しかったんじゃ、ないかな？」

——え？

と声を漏らしたのは私だけじゃなかった。

何言ってるの？とでも言いたげな目を向けているのは架折さんで、珍しく意外そうな表情を作っているのは識視さんだ。嘶さんとイオはなぜかそろって春の木漏れ日みたいな微笑を湛えている。悪く言うと思知り顔をしている。

そんな、皆の視線を一身に浴びているのは、いつも私と同レベルで単なる聞き役に落ち着いているはずの巳禱さんだった。

「あ？ 何言ってるの？」

言いたげな目だけでなく実際に言ってしまった、こらえ性のない人である。

「助けて欲しかったんだよ、誰かに。どん底な境遇から引つ張りあげて欲しかった、手を引いて歩いてくれる人が欲しかった、そういうことじゃないのかな」

「それ『引つ張る』って言葉をなんか無理やりイイコトへ結び付けようとしてるだけじゃねえの？ うまい事言おうとして失敗してるぞ」

「ええー！？ そ、そんなんじゃないのに……」

と巳禱さんは早速架折さんに揶揄されておろおろしているが、対照的に識視さんはすつきりとした納得顔になっていた。かく言う私も表情に出ているかは判らないが心境は多分似たところだろう。

なぜなら巳禱さんの言う解釈は、事実かどうかはそもそも都市伝説なのでなんともいえないが、少なくとも先ほどまで上がっていた矛盾点の答えとしてはなかなかにしっくり来るものだったからだ。

【ヒキコさん】が人を、特に子供を無理やり捕まえ引きずり殺す理由——それは一緒に外を歩いてくれる人を求めた結果ではないかということだ。

結果が凄惨なものになってしまうのは、精神を病んでしまった彼女の認識力が狂ってしまったゆえなのだろう。彼女にとって人は人を殺そうとか、ましてや痛めつけようなどと言う思考は全く無く、た

だ手に手を取って仲良く外を散歩しようとしているだけなのだ。

こう考えればいじめっ子と同じ名前や、似た境遇の子供を襲わないことにも納得がいく。己の天敵や同じ苦しみを知る人間に助けを求めるわけにも、まさかいくまい。

結局のところ、どう曲解したところで【ヒキコさん】にとつて救いのある結論には至れそうにないのは残念だけれど、理由のない災厄ではない思えたことは自己完結的ではあるが僥倖だ。苦手なのだ、そういう『理由が判らない』モノが、私は。

「その話だつて所詮尾ひれ背ひれなのよ？」

巳禱さんが架折さんたちに弄られている横で（いつの間にか心縁さんも加わってまた別の話を聞かせつつ巳禱さんの素直な表情変化を楽しんでいるらしい）、私や識視さんが一定の解釈を得られたことに満足しているとイオが空気を読まずに水を差してくる。

全く無粋なと目を向けると、てつきり茶化すような顔でもしているかと思つたイオの秀麗な眉目は酷く平坦だった。一瞬怪訝にも思つたが、彼女が基本ハッキリしない物事を好まない性質であることを鑑みれば、そこまで以外でもないかもしれない、とすぐに思い至る。

だからと言つて、イオの好む明確な答えなど出てきたりしないのだから、そんな表情をされるのは不当なイチャモンに漸近するのだけれど。

「良いじゃない、尾ひれ背ひれで」

あっけらかんと識視さんは返す。

「だつてそういうものでしょう？ 都市伝説つて。元ネタにしる後付設定にしる、それが語られてるなら異説含めてそれが真実なんだから。語られる場所、時間、人によって同じ話でも答えは違ってくるんじゃないかな」

こちらもちちらで身も蓋もない言いではあるが、常に心がフルオーブンな識視さんらしいといえらしい。

あらゆる事実も仮説もデマさえも信じて受取り、正しく己の知識

とする彼女はもしかしなくてもイオの活動に際して私よりも数段適任者なのではなからうか。

「それはそうだけれどねえ……」

都市伝説というものの曖昧さを苦々としつつも肯んじざるを得ないイオは、識視さんの言葉に眉と口を山なりの角度に歪める。意図した口車でイオにそんな表情をさせることが出来るのは、私の知る限り彼女くらいのものである。言っていることは特段の知己に富んでいるというわけでもないのだけれど、そこに伴う自信のようなものがすごいのだ。

軽やかなのに、揺るがない。

それを検索エンジンの権化みたいなのを相手取ってやっているんだから、その知力と胆力の強さたるや推して知るべし。公的に、という注釈付きとはいえ彼女を失った世界の損失は大きいに違いないと関心しきりでいたら、あまりに唐突に、にゅるりという擬音を想起させる動きでもって何かが私の身体に背後から絡み付いてきた。別にほかす必要も無いので明かすけれど、もちろん識視さんである。

……おかしいな、つい今さっきまで対面の席に居たはずなんだけれど。

「もう、いいじゃないですか。黎ちゃんも不安がってますよ」

その言葉、過ぎた用心で子にあれこれ言いすぎる父親を諭す母親のごとき包容力。私が今までついぞ経験したことのない温もりであるけれど、まあきつとこれはそういう比喻に合うだろう。

ただ、このタイミングで受ける類のモノではないと思うのだけだ。

というかちょっと苦しくなってきた。識視さん、力加減間違ってるよ。

「まあいいわ、それよりも今日中にでもちゃんと百年桜のところまで持って行ってよ? 【ヒキコさん】を保持した代役を。」

メンバー?

聞き慣れない単語だけれど、文脈からしてあの編みぐるみのことか。

別に長く持つておくつもりもないし帰りがけに行くためにもちゃんと持つてきてはいるけれど、釘を刺してまでせかす理由でもあるのだろうか。これを処理したら全部大団円だというならわからないでもないけれど。

「……取り出して見てごらんなさい」

指示の意図がよくわからなかったが、持つてきていたカバンから件の【ヒキコさん】を封じた人形を取り出して見る。何やら単に私が編んだだけであるはずなのに超常的な便利機能が付加されているらしいそれは、何の変哲もない毛糸で作られたのっぺらぼうな人形の――あれ？

「あら、黎ちゃん、間違つてもつてきちゃった？」

肩越しに覗き込んできた識視さんが私の手の中を見て言う。そう発言した彼女の意図はよくわかる。なぜなら私が取り出した『それは、【ヒキコさん】を封じる時に使ったものとはだいぶデザインが異なっていたからだ。

イオが私に作らせた――どうやら代役というらしい毛糸人形は簡素な造りで、真つ白な丸いのっぺらぼうの頭に起伏のない胴体と指や関節なんかはもちろんのように表現されていない本当にただの記号的な二頭身のヒト型をしているだけの代物だったのだ。

ところが今私の掌に仰臥するのは、頭身こそそのままだが頭にか黒い毛糸で髪の毛が表現され、胴体にもデフォルメしたワンピースのようなものが着せられている。さらにその手には赤くて丸い楕円形のボールらしきものが縫い付けられていた。完全に別物である。

「いいえ、それであつてるわ」

私自身も何か手違いを起こしたんだろうと自覚しかけたところに、イオはそんなことを言った。

いやいや、どの角度から見ようとまさすがにこれは私が造った手抜き人形とは似ても似つかない。こんな趣味の悪い人形を造った覚

えも所持していた記憶もないが……いや、なんだろうこのデザイン何処かで見たことがあるような気がする。

「あ、なあにそれ？　黎さんが造ったの？　可愛いね、なんのにおにぎょう？」

「あ？　なにそれきもい」

「そう？　自分も結構かわいいと思いますけど」

弄られて彷徨わせていた視線が私の手元に止まったらしく、識視さんが口を挟んできた。きつと話題を逸らしたかったのだろっけれど、これは、可愛い……んだろっか。どちらかというと私は続けて感想を述べた架折さんと同意見である。心縁さんの感性はあまりあてにできない。

「もしかして、これ【ヒキコさん】の人形？」

「コレクト！」

識視さんの解答に、まぶたでなく星が瞬くようなウインクを添えてイオが肯定する。

なるほど、言われてみればそう見えなくもない……が、問題は何を模しているかではなくなんでこんなものを私が持っているかというこど。

ん、これが昨日の人形に相違なく、そのデザインが【ヒキコさん】風になっているということとはもしかして、

「放っておくのそうなるのよ」

やはり、つまりこの人形は封じた対象の形を模したものに变化するということなのか、つくづく便利アイテムだな、こういう原理でこうなったんだろっ。

「ちよつと違うわ。昨日説明したでしょ、それは『一時的に』留めておけるだけの代物なのよ。時間が経つごとに封じたものの形へデテールを变化させていくわけ。で、さらにそのまま放っておくと、封じる前の姿に戻ってまた暴れだす」

……………。

「まあ、その分だとあと十時間程度なら持ちそうだから安心なさい。

……でもそうね、あまり暗いカバンの中に放置していると危ないかもしれないわね」

……なんて？ いや、なんで？

「名前からわかるとおり【ヒキコさん】は『ヒキコモリ』という存在への偏見が投影された存在でもあるのよ。つまり、暗くて密閉された空間に放置すると、元の自分の形を思い出しやすくなるかもしれないってこと」

私はその日、午後の授業を『ヒキコさん人形』を机上に携えて受けることとなった。

程度の差こそあれ、似た経験のある身としては同情が無いでもない。

が、私は【ヒキコさん】を助けることは——引っ張られてあげるなんてことはできないし、申し訳ないが正直ごめんだ。

ガラじゃない、というのもあるけれどそもそも私には他人に手を差し伸べられるほどの力や器の持ち合わせがない。

だからそう、せめて一つの教訓として活かそう。

私は誰よりも凡才で、ゆえにイオが引っぱり込む超常的な事件に際しては圧倒的に無力だから。

だから私は、ためらいなく助けを求めるとしようじゃないか。

彼女が無言のうちに求め、そして当然の帰結で手に入れられなかったモノを、幸運にも私は持っている。

伸ばした手を取って引っ張ってくれる人と、

その行為を許してくれる人たちを。

それらを私は、どうやら求める前から持っていたようだけれど、それを持っていることを気づかせてくれたのは【ヒキコさん】だ。

そうだな、巳禰さんではないが何かキレイな事でも言おうとするならこんなところか。

——私は【ヒキコさん】の手引きのおかげで、大切なことを学んだ。

とか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5727h/>

百年桜町奇譚～番外編～

2011年10月24日03時22分発行